

503

206

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始





謹んで本書を

深く青年を愛し、自らも青年の意氣を多分に有せら
るゝ子爵後藤新平閣下と

常に余を勵まし、余を愛撫せらるゝ恩師松村介石先
生と

余が切に、余の思想、信仰、感情を訴へんとする全
國幾百千萬の青年諸君とに
捧ぐ

獅子吼ゆ

誰か懼れざらんや

神の聲す

誰か叫ばざらんや



— 和州松洲氏筆 —

巻頭を飾る獅子吼ゆるの繪は、私の請を容れて、特に
畫伯齋藤松洲先生の靈筆を振はれたるものであつて、耳
を澄せば、不思議や、獅子の吼ゆるが如き大なる聲は、
我等青年の心の林にこだまして居るのではないか。等
は此聲に眼醒めて、益々人生の山深く分け入ると共に、
顧みて必ず之を強烈なる現實に生かす事を忘れてはなら
ぬのである。

理論より實際へ

——序に代へて——

私が慶應義塾大學部の教壇を辭して、東京市社會局に入らんとするや、學生諸君は、一日、私の爲に送別の講演會を催して呉れた。定刻、講堂に行つて見ると、正面筆太に「理論より實際へ」として、既に學生諸君により、私の演題は定められてあつた。爾來三年有餘、私は東京市に在りて、學生諸君が、私に與へたる「理論より實際へ」を標語として、之が實現に努めて來た。理論を實際に生かす所に強烈なる生活味を感ずる。そこには創造の喜びがあり、生産の樂みが存するのである。

序に代へて

序に代へて

二

本書載するところ、皆此體驗の聲であつて、其聲の大小強弱は必ずしも自ら問ふ處ではない。唯だ、其聲に何分かの創造の響きがあり、生産の力があれば足りるのである。

敢て、梓に上ほせて、全國の青年諸君に訴ふる所以である。

大正十二年三月

東京市外大森山王にて

著者

青年に訴ふ 目次

一 修養の生活化の高唱……………一

一、修養と生活は別個のものに非ず……二、忠君愛國の空騒ぎ……三、空論の破産……四、修養にも進化あり……五、青年團とは何ぞや……六、修養は由來一筋道……七、修養即生活の高調

二 誰か善き歌を歌ふものぞ……………三二

一、我等の生活に歌あらしめよ……二、我等の生活を歌たらしめよ……三、誰か最もよき歌を歌ふものぞ

三 現代精神とは何ぞや……………三五

目次

一

- 一、日本の事は世界の事……世界の事は日本の事……二、人間尊重即ち人格主義の高調……三、縦の文明と横の文明……四、職業神聖論……五、横の文明は自覚、自治を前提とす……六、社会心の涵養

四 我等いづこに行く可き乎……………七二

- 一、最高の生活形式……二、個性の尊嚴……三、社会我の徹底

五 現在主義の新提唱其一……………八五

- 一、感激は青年の獨占……二、聽え來る大自然の聲……三、非常なる心得違ひ……四、餘りに將來を祝し過ぎる……五、刹那を活かす生活……六、現在主義を勤む

六 現在主義の新提唱其二……………一〇〇

- 一、現在は將來の手段に非ず……二、常に現在に獨立價值を認めよ……三、一生を棒に振るな

七 現在主義の新提唱其三……………一二一

- 一、人生皆無常……二、現在にこそ極樂もあり、天國もある

八 運動體育の生活化を論ず……………一二七

- 一、社会教育の根本義……二、日本國民の偉大性……三、體育の生活化を圖れ……四、運動は青年少年のみのものか……五、近代日本人の生活の缺陷……六、實に偉大なる言葉……七、人よりも多く感ずる愉快……八、運動體育生活化の實例……九、肉體の改造が第一着手……十、健康の三大秘訣……十一、常に睡眠不足の日本人……十二、常に愉快なる修養

九 積極主義に生きよ……………一三九

- 一、東西兩洋の明の優劣……二、西洋文明に對する態度……三、西洋文明觀察の二つの型……四、然らば觀察の態度如何……五、西洋文明の長所は何か……六、消極主義のドン詰り……七、積極主義のドン詰り……八、日本人の陥り易い弊……九、積極及消極的

節約……十、積極節約の中心點

十 現代指導者の風格……………一六一

- 一、民衆時代の指導者……二、指導者は先づ己が氣分を檢討せよ……三、名槍の人……
- 四、民衆と共に偉大なれ……五、純乎たる社會人

十一 新忠義道……………一七四

- 一、偉大なる現代……二、新らしき國家哲學……三、支那の國民的良心……四、米國の國民的良心……五、日本我の活躍

十二 誰か靈界の正位に立つものぞ……………二〇〇

- 一、天下の廣居……二、人生の二百三高地……三、我田引水……四、オイケンの哲學……
- 五、誰か正位にたつものぞ

十三 汝が心刀の切味如何……………二二二

- 一、日本人にとつて日本程いゝ所はない……二、世界の粹を集めて居るニューヨーク博物館……三、ニューヨーク博物館で日本刀を見た時の心持……四、正宗の切味と心刀の切味……五、酒に酔つた裸の鶏を見て始めて心刀を發見す……六、世の中の吉凶禍福は心一つにある……七、體は投げられても心は投げられぬ……八、正直な心は石地蔵をも動かす……九、巻けば鐵拳の拳となり伸ばせば合掌の掌となる……十、意氣愛すべきロイドジョージ……十一、獨逸はロイド、ジョージが一番怖かつた

十四 日本青年を毒する二つの偶像……………二四九

- 一、日本人に對する頂門の一針……二、日本人を惱ます二個の偶像……三、日本は秘密主義信奉者……四、甚だ下手の兵法……五、第二の偶像は先輩崇拜……六、崇拜と尊敬とを混同すな……七、奈翁の二つの肖像……八、醒めよ日本青年

十五 没法子……………二六三

- 一、露國のニツチエウオ……二、支那のメイフワーズ……三、大いに仕方がある

十六 小供たらずんば大供たれ……………二七〇

十七 日本は美しい詩の國……………二七六

十八 米國の子供の立場と日本の小供の立場……………二八四

十九 歩むに非ず、走るに非ず、飛ぶなり……………二九二

二十 時間の活用……………二九九

二十一 英雄ルーズベルトを憶ふ……………三〇六

二十二 ジョツフル元帥を迎へて……………三二八

青年に訴ふ

大 迫 元 繁 著



一 修養の生活化の高唱

修養と生活は別個のものに非ず

ウイルソン大統領の勘忍袋の緒が切れて、獨逸に向つて宣戦の布告を發した
大正六年の夏、私が、再び米國ロス、アンゼルス市を訪ふた時の事であつた。

一 修養の生活化の高唱

一

そこに、日本人で、表面熱心に見えた一人の宗教信者が居た。すると其人の住んで居た附近の、日本人の鶏が頻りに盗まれる。いろいろ注意して調べた結果は、奚んぞ計らひ、その宗教信者が、鶏泥棒を働いてゐたことが分つた。そこで早速、この信神家は、警察に訴へられんとしたが「お互に遠い米國へ働きに来て居る日本人仲間のことだから、何とか内済にしたらばどうか」と、云つて、仲に立つて奔走する人があつたので、盗まれた人々も、日本人の恥を外國の明るみへ曝すも不本意なればとて、大いに讓歩して、許してやらうと云ふ事になつた。そこで仲裁人の計らいで、心ばかりの仲直りの祝ひをする段取となつた。所が其の鶏泥棒の信神家は、「自分は何々教の信者だから、この手打の會には一切酒を用ひぬやうにして貰ひたい」と主張して容易に自説を曲げなかつた。自分は熱心な宗教信者であると思つて、度々會堂等にも行つて説教なども聴く。

然るに、一方では、人に隠れて盛に泥棒をやつて居る。曝露した自分の不仕末は上の空で、仲直りの席上、自分は神を信する者だから、酒を用ふることに同意が出来ない。斷じてそれは見合して貰ひたいと、非常な勢で反對した。何と面白い又可笑な話ではないか。是に依つて考へて見ると、宗教は宗教、生活は生活で、全く別種のもの、様に思はれる。一方では神を信じ、他方では泥棒をする。これでは神信心と泥棒とが兩立することになる。茲に、私には、考へなければならぬことがあると思ふのである。何となれば、此様なことは何も右の信者一人に限つた事ではなく、實際は五十歩、百歩、多くの人も、泥棒こそせざれ、亦同じ様な事を平気でやつて居るからである。是を即ち、修養が生活化して居ない結果に外ならぬのである。

忠君愛國の空騒ぎ

東洋の修養なるものは、兎角、日常の實生活以外の事でもあるかの如くに説かれた。けれ共、私は、生活を離れて修養はないと信ずるものである。忠君愛國は國民としての修養である。然かも生活を離れて忠君愛國はない。生活を離れて天下國家もないのである。例へば日本は世界一の君子國、日本人は偉大なる愛國者だと誇つて居るが、顧みて一度日本の各種の商品を見たならば、誰か、日本商品の背後に、道德ありと言ひ得やう。何も、殊更、歐米を崇拜する譯ではないが、獨逸なり、英吉利なり、米國なりへ暫く住んで居た人は皆よく實驗して居る事で、一般に歐米の商品は實に確かなものである。直ぐに壊れるとか、すぐに役にたゝなくなるとかいふ事は先づ殆んどないと云つてもよい。現

に歐米に留學や視察に行つた人々が、日本に持ち歸つて使つてゐるものには、一生用ひられる様な確實なものが多い。之は何と言つても事實が雄辯に我々に語つてをる所であつて、否み難い所である。これに較べると、日本の商品は概して、たゞ、儲けさへすればよい、體裁を飾つて賣れさへすればよい、客が、後で困らうが一向關する所ではないと云つた風である。日本の玩具類に至つては、之を求めて家へ持ち歸れば既に壊れてゐるといふ次第で、玩具は壊れるものだと、相場が極つて居る様な哀れな状態である。米國にアトランチック、シテイといふ世界一の大海水浴場があるが、或時、そこで日本人が、日本商品のあきないを始めた。所が、買つて行つた客から、よく小言が来る。折角買つたが家へ持つて歸つたら、直ぐこはれて仕舞つた。こんな物を賣つては困る、と云ふ。或人は不正品を賣つたのだから金を返せといふ様な仕末で、とても此様な

ことを繰り返して居た日には、店の信用を失ふばかりでなく立つてゆくことすら出来ないから、日本人の店主は、それから独逸品を日本品だと云つて賣り出した。店は米國人に珍らしい日本品を賣つて居る様に見えるが、何んぞ知らん、賣つて居る品物は獨逸製のもの許りであつた。

一度外國へ足を踏出した人は、到る處で粗悪なる日本品の攻撃を聞かされる。遺憾なる哉、我が外國貿易の不信用は世界的である。斯の如く只だ、商品に就て考察して見ても明かなるが如く、東洋君子國の修養は、残念ながら具體化し、生活化して居ない事が多いのである。國民道德たる忠君愛國が、日常の實際生活に實を結んで居ないのである。苟も君子國を誇り忠君愛國を口にする程の者若しくは天下國家を論ずる程のものが、この日本商品の醜態を見たならば、實際日本の忠君愛國や、天下國家論なるものが、餘程不可思議なものであ

つて、緊禪一番、之を現在生活に翻譯せねばならぬ事に氣が付かずには居られないであらう。

然り、我等は、我等の忠君愛國、我等の天下國家論をして、之を實際に生かし、日常生活に體現せしめなくてはならぬ。然らずんば我等の修養は遊戯であり、空想であり、晝あんどんである。

其筋から頼まれて、東海道から東山道を経て九州に至るまで、大いに國民道德を論じ、倫理修養を談じた或人が、遂に九州の某地で泥棒をしたといふ話がある。是を聞いて京都大學の某教授は、「忠君愛國は、宛も比叡山上に引掛つて居る雲の様なもので、山下の京都の町には一向に降りて來ぬ」と言つて憤慨した相である。寔に其通りで、「愛國を叫ぶものに眞の愛國者なし」といふことをよく聽くが、心すべき事ではないか。よし、實質は立派なものであつても、皇

國何々團とか、愛國何々會とか言つた様な文字を使用するものに對しては、何となく古いとか、怪しいとか、危いとか、信用がならぬとか、云ふ感じを起させる様になつて居る。是ぞ、これ迄大聲叱呼せられたる日本人一流の國民的修養が實際に現はれず、生活に織り込まれなかつた結果ではないか。

一體、生活に體現せられない修養なるものが人生に必要であらうか。修養が若し生活を離れて存在するものであるならば、私は人生に修養の必要なしと斷言する。生活は生存とは違ふ。生存は、犬でも猫でも馬でも持つて居るが、彼等は所謂生活といふものは持つて居ないといふ事ができる。然らば、生活とは何かと云へば、私は、生活は、創造であり、生産でなければならぬと考へる。而して修養は生活である。然らば即ち修養は創造であり、生産でなければならぬ。これ迄、多く世に説かれた修養なるものは、人間の日常生活とは没交

渉なもので、生活を離れた一種の遊戯に過ぎない。空想に過ぎない。言葉を換へていへば零であつたのである。無を弄んで何をせんとするのか。私は斯様な修養は有害無益と考へるのである。

空論の破産

次に又、修養の極致は、大悟徹底とか、大死一番とか、いふ事の如くに説くものがある。或は宇宙を達觀せよとか、丹田に力を入れよ、とか云ふ。之に對しても、私は、疑ひなきを得ない。自分の職業を等閑にして、大悟徹底も宇宙達觀もないものだと思ふ。こゝに一個の商人ありと假定せよ。その商人が、朝に夕に禪寺へでも通ふて、大いに悟りを開くのだと云つて、一生懸命に凝り堅まつて居る。そうして、自分の家業は殆ど顧みずして、所謂精神修養に夢中に

なつて居るとせよ。これは一體何事であらうか。私は商人の第一の修養はまじめな商人になる事に外ならぬと考へる。

商人のみならず、總ての人は皆わが職業に熱中し、これに向つて自分の最上の努力を傾注する事を外にして、本當の修養は無いものだと思ふのである。自己の職業以外に別に修養ありとするが如きは、日常生活以外に修養生活あるが如くに考へる誤謬から來たものである。所謂大悟徹底や、大死一番や、宇宙大觀や、忠君愛國や、天下國家論等は、如何にも一應は勇壯活潑に聽ゆるけれども、内容亦極めて貧弱なるを語るが如くにも響くではないか。そういふことを口にする人ほど、自分の日常生活を閑却して、生活化しない空論を振廻したがる。現代青年は目醒めねばならない。既に今日は、左様な古い空虛な考へに夢中になるべき時ではない、我等は活眼を開いて、現實生活に努力しなければ

ばならぬ。東洋は是迄、外觀はいかにも高大に聞えて、然かも多くは内容貧弱に終るが如き、斯る空論に日を過して來たのであつた。

而してその空論の破産を來して居る現状の如何に悲惨なるかを、眼を上げて見よ。實に今日東洋は、これが爲に亡國の慘狀を呈して居るではないか。埃及を見よ。印度を見よ。而して又、支那を見よ。我等は、斷じて眞の修養を排斥せんとするものではない。然しながら、生活化しない、實際化せぬ修養は、極力之を排斥せんとするものである。嚴格にいへば、斯くの如きものは、修養とは云へぬ。警戒せよ。今日青年にして、かかる空論的なるものに、可惜貴重な時間を空費して一生を棒にふるんとするもの甚だ多き事を。

修養にも進化あり

更に眼を轉じて見ると、亦一種の、所謂修養がある。即ち、朝は未明に起き、寒中と雖も、水中に飛び込む。水中よりあがれば、更に二、三十分間坐禪をする。それが済めば梅干で御飯を食べて、愛國の講演をきく、と云つたやうな事が修養でもあるかの如くに考へ、今更ながら之を高唱して、天下を救ふ様なことを云つて居るの類が、それである。よく地方の青年諸君が、この種の修養會に集まられるやうであるが、私は必ずしも之を悪いとは云はないけれども、そんなことのみでは、二、三百年の昔に逆戻りするものだと考へる。その様なことは、昔の青年になれといふ事に過ぎぬ。修養にも進化がなければならぬ。今日の青年を捕へて、右の様な事が修養であるといふに至つては、まことに情けない事と考へる。それよりも、地方の農家の青年ならば、己が家業に精神を打込んで、懸命に努力することこそ、眞の修養に外ならぬ。小學校の教

員であつたなら、教育といふ事に精神を打込んで、之が實効を上げる事の方が本當の修養である。

古臭い事を真似て、數百年前に逆戻りすることを以て修養と考へる様な迷夢から醒めて、我等は、道理ある修養を本とし、科學的生活を行ひ、理性に従つて生きねばならぬ時代である。もし人生に修養ありとせば、それは、眞面目にして平凡なる日常生活を醇化し、熱化し、深化するものでなければならぬ。否、生活そのものが、修養でなければならぬ。我等の足は、しかと大地について居なければならぬのである。

青年團とは何んぞや

或人が、其筋から、模範青年團とか、優良青年團とかの推奨を受けた或地方

の青年團の視察に出かけた。そして、その青年團の在る村の入口に到つた時、村の中老とも見へる人が馬を洗つてゐるのに出會つたので、是れ屈竟の相手と考へた其の視察者は、村人が馬を洗ひ終るのを待つて、其後に従ひながら、自分も村に入つた。その時此の視察者は、あとから聲をかけて「もしく、私は旅の者ですが、御村には、模範青年團があるそうで御座いますか誠に結構な事で、お喜び申上げます」と話しかけた。すると、馬を曳いて居た村人は答へて「はい、聞けば模範青年團とか優良青年團とか云ふのだ相ですが、誠に、はや、困つたもので、宅の俵などは、青年團が出来てから、始終呼び出されてばかり居て、家業は手につかず、青年團の用だ青年團の爲だといつては、家を留守にする事が多くなりました。いやはや、模範青年團、優良青年團も困りものです」と云ふ意外な答をした相である。

是實に、一ツ大いに考へて見なければならぬ事ではあるまいか。即ち青年團員と云ふものは、自身の日常の家業と離れて、別に何か獨立したる特別の團員生活があるが如くに考へて居る結果、此様な事になるのではないか。是、何か違つた青年團員の仕事と云ふものがあつて、自分の日常生活に於ける大切な仕事を棄て於いても、青年團の仕事をしなければならぬと云つた様な、何か自分の日常生活以外に、別個の團員生活があるかの如くに考へ誤られた結果である。私は其様な青年團は、決して優良とも模範とも思はぬ。日常生活と調子が合はず、日常生活の原動力ともならぬ青年團が何の役に立つだらうか。成程其の青年團は或は消防、或は道普請、或は植林、或は敬老會と云ふ様な、色々其の事業をして、之に熱中し、一見、何か村の爲めにでもなる様な事をしたかも知れぬが、それが爲めに、團員は皆稼業を等閑にし熱心、健實なる農家の青年

たるの實を示さず、家の者には不満を懐かしめて居るのである。さう云ふ事は今日の青年團の目的とすべきものではない。私は右の視察者に對して語つた村人の言葉に、全然利己的の考へが、無かつたとは云はぬが、己が稼業を外にして、親に不平を云はせ、家族が迷惑をして居ると云ふ様な青年團員であつたならば、其の青年團は考へ物である。必ずや眞の青年團たるには其の中老の村人が「はい、ありがとう御座います。青年團が出来てから、村も大層立派になりました。宅の倅も、我子ながら見違へる様に立派な青年になり、稼業にも精を出すやうになりました。月に二度や三度四度、青年團の爲に呼び出される位な事は、少しも差支へない許りか、それが爲に倅が立派なものになるので御座いますから、私共は喜んで、出して居ります。」と斯う答へる様でなくてはならないのである。かゝる青年團であつてこそ、内容外觀共に備つた青年團生

活であり、深く生活に根底を置ける生きた青年團であるといふはねばならぬ。青年團は決して、團員が仕事を爲の事業團體ではない。團員各自の全人格の向上を計る修養團體である。而して生活と一致せぬ青年團や青年會であつたなら、生活と離れて修養なきが故に、それは即ち青年團でも修養團體でも何でもない。空なものである。

修養は由來一筋道

青年團が眞の修養團體であるが爲には、團員各自の日常の生活を、深からしめ、清からしめ、強からしめ、熱あらしめる所のものでなければならぬ。農家であるならば、眞面目なる農家になる。商人であるならば、忠實勤勉な商人になる。職人であつたなら、推しも推されもせぬ職人になる。是れ眞の青年團員

の本領であつて、修養とは斯くの如きものでなければならぬ。生活を離れて修養はない。日本人は覺醒せねばならぬ。我等は永い夢を見て居た。空に懸つた修養の夢を見て居た。生活を離れた修養と云ふものに夢中になつて居た。埃及の如く、印度の如く、支那の如く、悲惨なる空論の破産を來さざる様注意せねばならぬ。「君に忠ならむと欲すれば親に孝ならず、親に孝ならむと欲すれば君に忠ならず、重盛が進退極まれり」と云ふ事を重盛が云つた様になつて居るが、此の言葉丈けの意味は決して正當なものとは云へないのである。若し是が、正當な、感ずべき言葉であつたならば、日本國家は即座に轉覆せねばならぬ事になる。何となれば日本の國家道徳は破壊されるからである。故に、重盛の眞心は兎も角も、言葉は決して正當ではない。「君に忠ならむと欲すれば即ち親に孝、親に孝ならむと欲すれば即ち君に忠」でなくてはならぬ。君に不忠なる

に逆らつて、親を制して忠ならむ事を勸め之を強制するのは是君に忠なると同時に親に孝なる所以である。忠孝は、一筋道である。油と水の如く相反撥するものではない。さればこそ「忠臣は孝子の門より出づ」るのであつて、君に忠なるは親に孝、親に孝なるは君に忠なる事に外ならぬ。斯の如く我々の生活は常に一本で行かねばならぬ。例へば眞面目なる國民、眞面目なる青年團員、眞面目なる忠君愛國論者ならんとすれば、眞面目なる商人であり、農家であり、労働者であり、役人でなければならぬやうなものである。此頃頻りに社會奉仕と云ふ事が唱へられて居るが、是亦世人は、何か我々の日常生活以外に、特別な事をするのが社會奉仕であるかの如くに考へて居る。例へば青年の社會奉仕は其の家業を差措いて迄も、成さねばならぬ特別な貴いものでもあるかの如くに考へて居る人が多いやうである。青年の第一の社會奉仕は、先づ青年自身の職

業若くは學問に眞劍になる事、言葉を換へて云へば、青年自身が立派な人間となること云ふ事であつて、之以上の社會奉仕はないのである。己を修めずして何の社會奉仕があらう。固より、己を空ふして社會國家の爲に盡さねばならぬ事は多い。乍併、それが社會國家に對する眞の奉仕であるならば、即ちそれは同時に自己奉仕であつて、自己の人格の完成に向つて一步を進むるものに外ならぬ。自己を離れて社會奉仕はないのである。

修養即生活の高調

天下國家を論じ、忠君愛國を高調するのもよい。大死一番、大悟徹底を説くのも差支へはない。社會奉仕、寒中水浴、梅干主義を鼓吹するのも亦悪くはない。乍併、之等をして實生活に即せしめ、各自は己が立場に徹底し、日常平凡

の生活を深化せしむるに非らざれば、徒らに外觀美にして内容空虚、結局は無用の長物に終らざるを得ない。

試みに思へ、日本七千五百万の同胞が、修養の生活化を實感體現し、修養即ち生活、生活即ち創造にして生産なる事を如實に識り、各自が着々己が職業に精勵努力せんか、個人の幸福は勿論、國家社會は之が爲に水も漏さぬ緊張振りを示す事であらう。徒らに空想に生きる勿れ。内容貧弱にして勇壯活潑なる文句に溺るゝを止めよ。聲のみあつて形なきが如きものに、浮身をやつすの愚をなさざれ。新しき時代は、新しき修養を要す。覺醒せる現代人は、生活即修養、修養即生活なる一筋道を堅く踏占めて行かねばならぬ。我等感ずる所あり、修養の生活化を説いて止まぬのである。

一 誰か善き歌を歌ふものぞ

我等の生活に歌あらしめよ

我が日本には、生活化した體育がない。學校内や兵營内に於ける體操はあつても、日常生活に於て活きた民衆化した體育がない。

同じ意味で、日本に於ては生活化した音樂が現はれて居ない。成程、在來の日本音樂は一部民衆化してゐると云ひえないではないが、今日の音樂は歐米の音樂に傾倒してゐる事多きが故に、勢ひ未だ混沌として生活化する迄には至つて居らない。

されば、例へばこゝに、五人なり六人なりの人々が男女老幼打混じつて集つたとする。もし之が歐米諸國であるならば、これ等の人は、たちどころに調子を合せて何等かの歌を歌ひ出すに少しの困難をも感じない。彼等は共に樂しく歌ふ事が出来る。然るに、日本人には仲々此藝當は出來ないのである。即時に、そしてあの樂しく喜ばしげな歌聲を聞き得る望みはないのである。あはれひべし、日本人は共に樂しく歌ふべき歌をもつてゐないのだ、丁度、或る特定の時間に特定の場所で行ふ運動や體操の外に、生活化した體育がないのと同じ程度に、否夫以下に、日本の音樂は或る特殊の人々が、特殊の時と場所とで歌ふ位のもので、我々の生活を清め、情操を育み、力ある人生を造出すといふが如き民衆化した生活化した音樂は未だ我等の中にはないのである。

もつとも、日本人が、國の内外に於て、心を合はせて歌ひ得るものが、唯一



つある。それは即ち「君が代」である。海外に出で、祖國日本の祝日等に、十人、五十人、百人の同胞が相集つて、遙かに天皇陛下の萬歳を壽き、國運の隆昌を祈りつゝ、心を合せて此の「君が代」を歌ふときは、何とも云へない一種の情操が湧き立つて來て、湧然として日本國民たるの覺悟が滿身を浸すの覺ゆるのである。實に我々が「君が代」を歌ふとき丈は、二十人でも五十人でも、さては何百人でも、氣も心もビタリと合ふて、鼓舞激勵されて居るやうな一種崇高の意氣に燃立つのである。實に「君が代」は日本國民間に於て、或程度迄の生活化を語るものと云つてもよからうと思ふのである。

然し乍ら、我々は、たゞ一つの「君が代」だけしか持たないのだ。そして、この「君が代」は時と場所に關係なく、自由に歌へるものではないのだ。我等の家庭に、集會に、友人の訪問に、或は相たづさへて郊外散歩のときに、聲を

合せて歌ふ歌が欲しいのである。米國では老幼男女互ひに聲を合せて歌ひ得る歌が四十ばかりあるさうである。今回、東京市で、市民合唱團を組織して、音樂宣傳を試みやうとして居るのも、要するに音樂が、もう少し、我が東京市民の生活と歩調を合はせ、その生活を淨化し、その情操を高からしめ、その生活に喜びあらしめ、更にその生活に強い熱あらしめたいと切望する故に外ならない。われらの生活をして、更に文化的ならしめ、更に愉快ならしめ、更に情味あらしめんため、一言にしていへば、我等の生活を一層、豊富ならしめん爲め、ここに音樂の生活化を實現せんとする。是實に私共の狙ふ所に外ならないのである。

我等の生活を歌たらしめよ

以上は、音楽と我々人間生活との關係を述べたものであるが更に進んで人生其物を思念、凝視せんか、實に我等の人生さながら、生活其儘が、即ち直ちに歌ではないか。音楽ではないか。さうだ、我々の生活其物を、熱あり、力あり、喜びある歌たらしむる所に我々の強い狙ひ所があるべきではないか。「人生は歌なり。」この言葉こそは、實に我々の大なる反省と瞑想との善き材料である。アメリカに行つて見ても、英國に行つて見ても、扱てはフランスへ行つて見ても、各自皆獨特の國歌を持つてゐる。しかしその國歌は、偉大なる國民を背景として始めて偉大なるものとなるべきである。冀くば我等をして偉大なる歌を歌はしめよ。然り、この五尺の身體を以て偉大なる歌を歌はしめよ。時已に快き秋に入つて、千草にすだく虫の音は千紫萬紅のそれならなくに、とりくく面白き極みである。彼等の歌は生活であり、彼等の生活は歌である。我等も

又めいゝ得意の歌を歌ふ可きではないか。嗚呼、誰か最もよき歌を歌ふものぞ。

歐洲大戰將に勃發せんとするに當つて、獨逸皇帝カイゼルは叫んで云つた。

「この戦争は我等の勝ちである、何となれば神は我等の味方であるから」と。
 曾て米國南北戦争最中、勝敗の數、逆睹すべからずして國中暗澹たる時、或人が大統領リンカーンに向つて「大統領よ、此戦争は我等の勝である。何となれば、神は必ず我等の味方に立ち給ふに相違ないから」と述べた。スルと、リンカーンは容を正して曰つた、「否とよ、神が我等の味方であるや否やは私の念とする所ではない。私が日夜心を勞してゐる事は、我等が神の味方であるか否やといふことである」と。

英雄の末路實に哀れなり。事破れて今こそは配所の月を眺めては居るけれど

彼カイゼルたるや、不世出の英傑として一時は世界を震撼せしめたのだ。されば、彼が豪壯な氣を起して、神も亦我が味方、我がなす所に賛成を表するに違いないといふ、彼が確信より勇往邁進の精神を吐露した所、賞賛の値なしとせぬのであるが、然し乍ら徹頭徹尾、彼の考は、自我を離れることが出来なかつた。常に世界のあらゆるもの、根原、宇宙の創造者たる神をも、わが主觀の内に入れて、自我の虜とし、自我の爲に之を利用せんとする所に、禍の芽ははぐまされた。かくては、最後の勝利は、此人生に於ては斷じて得られるものではない。シーザー然り。ナポレオン亦然りではないか。

之に反して、天下の大野人、之を例ふれば恰も無細工なる大木の如き風貌を備へてゐたリンカーンの、その胸に抱いてゐた明鏡には、實に常住美しき眞理の月が宿つて居たのである。されば歴史に比類稀なる麗朗玉の如く、然も明智輝

きわたつてゐた天下の好漢リンカーンの人物は、南北戦争のその眞最中、どちらが勝つか負けるか分らぬと云ふ大不安の裡にも、然り日夜政務や軍務に執掌してゐる大努力の最中にも、ひそかに、わが従事してゐる此の戦争は果して神の心に協ふものであらうか、どうか、我等は今正しからざる戦争をやつてゐるのではなからうかと、正しく美はしき彼のその眞心は、實に人知れず深い尊い又高い煩悶に苦しめられてゐたのであつた。實に彼は、徹頭徹尾自我をすて、大我に生き、主觀にとち籠らずして客觀に立ち、わが爲に天下國家を利用せずして、われ、天下國家の爲に利用せられんことを希ひ、わが爲に道理を曲げずして、道理の爲にわれをすてんことに努力し、神をわが味方にせんなどとは寸毫も考ふる事なく、自分が神の味方たり得るや、否やを心配したのであつて、正しくカイゼルの行き方とは正反對の方向を示して居るのである。同じく

國家危急の際、雨となるか風となるか恐ろしき其時に當つて、この兩個の英雄の内何れが果して、よき歌を歌ひしものであらうか。云ふ迄もない、カイゼル
の豪壯なる歌は、リンカーンの尊い歌に及ぶべくもないのである。

カイゼル一生の歌を、直ちに以てリンカーン一生の歌と較べ見よ。前者の歌は旺んは旺んであるけれども、後者の歌の真に偉大なるに比すべくもないではないか。時は秋である。窓前一步、耳を傾ければ、或は二歩三步、郊外に足を向くれば實に千草にすだく蟲の音は、己がじ、得意の歌を歌つて居る。十七文字の俳句や、三十一文字の和歌のみが歌ではない。我等の感懐、我等の情緒我等の意氣を文字に托して表はすのも亦歌に違ひはない。然し乍ら、その感懐、その情趣、その意氣を、直ちに我等の人生々活に具體化して、五尺の身體その物を以て偉大なる歌を歌はしむることが、更に最も愉快なることではあるまいか。

實に人生は歌である。君が歌ひとつある君の青年の歌は如何。わが歌ひとつある歌は如何。省みて我々は、果して天地に恥ぢない力強い歌を歌つて居るであらうか。

誰か最もよき歌を歌ふものぞ

人、十人集れば十人異なる。俗に十人十色といふが如く、我等各々の歌ふ歌も断じて同じではない。

試みに手を見られよ。五本の指は皆異なつてをる。拇指、人差指、中指、薬指、小指、皆同じものではない、拇指の歌ふ歌と人差指の歌ふ歌と、扱ては中指、薬指、小指の歌ふ歌とは皆な同一のものではない。わが歌ふ歌は、或は拇指の歌かも知れぬ。君が歌ふ歌は、人差指の歌かも知れぬ。中指、薬指、さて

は小指の歌を歌ふ役目に廻る人もある。何れもその使命を達すれば、何れ劣らぬ善き歌を歌ふたものである。

或者は政治家となつて花々しき人生の歌を歌はむと試むるであらう。それ則ち結構である。或者は學者となつて深遠なる人生を歌はむとするものもあらう。或は又實業家、或は又百姓として人生の歌を歌はむと試むるであらう。皆結構である。五本の指が皆違つた歌を歌へばこそ、この手がよく働く、われ／＼が皆向ふ所に邁進して人生の歌を歌ひ、この歌をして力あらしめんか、亦必ずしもその種類を擇ばぬ。たゞ力ある歌を歌ふ。たゞ偉大なる歌を歌ふ。たゞ喜ばしき歌を歌ふ。たゞ常に燃え、常に積極的に進まんとする歌を歌ふことをこそ願ふのである。而して最も善き歌手は實に青年でなくて誰であらうか。

青年西郷南洲は常に大なる歌を歌つて居た。最後に彼の歌に一點の染がつか

んとしたけれ共、彼が四十年の歌は、遂にそれを洗ひ清めて之を全ふすることを得た。伊藤博文は政治家としてよき歌を歌つた人であつた。彼或は道徳家の立場より見たならば遺憾なしとせぬのは勿論である。最近物故した大隈重信は、常に世界に響き渡る歌を歌ふことを努め、日本人としては珍らしい大きな歌を歌つてゐた。故總理大臣原敬の歌はどうであつたか。兎も角も彼は一種獨特の音楽を奏でゝゐたと云ひ得るであらう。

然し、身は一國の宰相、或は世界に轟く人物とならずとも、假令一坪の土地を耕す者と雖も、たとへ口に一錢二錢を争ふ小さき商人といへども、何者にも劣らぬ善き歌を歌ふ事が出来ぬ理屈はないのである。或百姓は歌ふて曰く「我が耕すの地狭しと雖も、仰いで天に嘯けば、天何ぞ廣きや」と是實に偉大なる歌を歌はんとするものではないか。耕すの地狭く貧しき百姓と雖も、よき歌を

をして居られます諸君、他の言葉を以て申しますれば、此實生活に於て、詰り花よりも團子、悪い意味ではありませぬ。詩を作るよりも田を作る方々に於かれても、其詩其花と云ふものは、どう云ふ風に實社會に織込まれて行く可きものであるか、どう云ふ風にさう云ふものが働いて居るかと云ふことを、御承知でもありませんが、御参考迄に申述べやうと存じます次第であります。

我が日本の人々には悪い癖がありました、既に此日本と云ふ國は、世界大戦が濟んだ時には、世界の五大強國の一に入りました。五大強國の一になつたと云ふので日本では可なり喜んだのでありますが、次に開催された所の華盛頓會議では更に又世界三大強國の一に入つたのであります。ちよつと此五六十一年間に、小さな島國が世界三大強國の一になつた。世界の三本の大黒柱の一つになつたのであります以上、詰り日本の問題は世界の問題、世界の問題は日本

の問題でありますのに、いつ迄も我々が小さい甲羅の中に入つて居つて、あれは西洋の思想である、是は日本の思想であると言つて區別をし、毛嫌ひをする。さう云ふことは了簡の狭い話で、今日に於ては世界の思想は日本の思想、日本の思想は世界の思想、斯う云ふ風に考へなければならぬのであります。世界と云ふものは此三本の柱即ち日英米三ヶ國で立つて居る。當然世界の事は日本の事、日本の事は世界の事である。實は是は日本の事、あれは西洋の事と言つて居りながら、日本人程西洋崇拜者は無いのであります。口では同化して居ないやうに言つて居りながら、日本程同化して居る國は無い。國を舉げて西洋に同化して居る。支那などは同化して居ない。居ないから、あゝ云ふ哀れな状態であるとも云へませうが、日本の状態は如何であるか。先づ家を見て御覽なさい、早速、只今私共の居る此家は西洋館であります。會社學校官公署と

云ふやうなもの、何れも日本本來の家ではない、西洋の家であります。日本人の着て居る着物はどうなつて居るか云ふと、多くは今日、本當に活動する時に着る着物は西洋式の着物であります。だから日本の着物は亡びつゝある。日本の家も亡びつゝある。併し、更に一段、高所に立つて觀れば、是は此着物は西洋の着物ではない、世界の着物である。西洋の着物を着て居ると考へると心平かならざる人があるかも知れませぬが、是は世界の着物であると考へる。又世界の家であると考へる。又食物でもさうであります。よく宴會の時には西洋料理を食べなければならぬことになつて居る。日本料理では治まらぬ事が度々あります。

話は元に戻りますけれども、先般東京市で英國皇太子殿下の歓迎を致しました。殿下に帝國劇場に御出でを願ひまして歓迎を致しました。先づシルク、ハ

ットであります、それから燕尾服、イヴニング、ドレス、これを着て行かぬばならぬ。日本人はフロック、コートが好きですから、大抵はフロック、コートなら持つて居りますが、燕尾服のやうな特別の着物は皆が皆持つて居るとは限りませぬ。非常に困つてしまつて、あちこちから借着をして行くと云ふやうなこともなきにしもあらずであつたのであります。詰り日本で西洋の尊い國賓を御招きするのに日本の着物では通らないと云ふことになつて居るから、随分可笑しい事ですが、それは左程心配するには及ばない。日本人は同時に世界人もなつて居るのであるから世界の着物で御招きするのだ、と考へれば宜しい。詰り電信でも電話でも、學校でも工場でも、機械でも、何でも彼でも殆ど今日の文明と云ふものは皆西洋から來て居るのでありますから、實際は今日の日本の文明は西洋から來て居る。否、日本が世界的になつたのであります。さう云

よ次第であるから、何か少しばかり特別な事になると、それは西洋だ、あれも西洋だと云つて、大層區別したがるのはお可笑しいことであつて、心氣一轉、私共は世界の人間である、世界の家は日本の家、世界の着物は日本の着物、世界の食物は日本の食物、斯う云ふ風に考へて行きますれば日本の國も更に偉大なる發展をするに違ひないと思ひます。我々が少し何か西洋の長所を擧げると直ぐに西洋かぶれをして居ると言はれる。でありますから、日本の講演會などで御話するには先づ一度西洋を叩き付けて、それから西洋を出さなければ反對されることがある。日本にも良い所があるけれども、又悪い所もある。西洋にも悪い所があるけれども又良い所もある。假に今其良い所を申上げると云々、こんな風に持出さなければ、西洋かぶれをして居ると言はれることがあるのであります。今日の日本は、日本の日本ではない、東洋の日本でもない、世界の

日本である。日本は世界三大強國の一に這入つたのであるから、日本の思想は世界の思想、世界の思想は日本の思想、さう云ふ考で御話を進めて行きたいと思ふのであります。

人間尊重即ち人格主義の高調

第一に、今日世界中に叫ばれて居て、我々の心の内に、しかと、入れて置かなければならぬ最も強い大切な思想は、人間の價値、人間の尊重、個人の價値と云ふことであります。他の言葉を以て申しますれば、人格主義であります。此人間の價値と云ふことが今日非常に唱へられるやうになつたのであります。不幸にして日本などでは之が認められず、人間拔きのことがよく行はれて居るのであります。世界到る所で今日は人間を表面に出して、人間の社會にしやう

ぢやないか、と云ふ叫びが起つて来た。總ての人が人間らしい待遇を受けたい詰り人間でありたいと云ふ考から此叫びが現れて来たのであります。ところが手近なる例を取つて申しますれば日本には人間拔きの社會が行はれて居ると云ふのは、例へば日本の學校、先づ小學校に行つて見ると、小學校には人間が居らぬと言ひたくないのであります。すると、それはお可らしい、教員と云ふ人間が居るし、生徒と云ふ人間が居るぢやないか、と言はれるでせうけれども、それは人間ぢやない、教師と云ふものである、人間ぢやない、生徒と云ふものである、と御答へしたい。日本の多くの學校は人間と云ふものが居らずして、教師と生徒と云ふものが居つて教育が行はれて居る。教師も尊い人間、生徒も尊い人間、御互に尊い人間と尊い人間とが集つて教育が行はれるのだ、と云ふ考へを以て今の學校の教育は行はれて居るか、どうか。一方は、うんと叱

り飛ばして、しかつめらしい顔をして居る、片方は小さくなつて、へいしくしてばかり居る。それは勿論、先生と生徒の區別はなければならぬけれども、其區別のある中に、先生も尊い人間なら生徒も尊い人間であると云ふ強い人格的な考があつて教育が行はれなければ、結局人間拔きの教育であつて、其の教育には熱が無い、力がないのである。さう云ふ無氣力の教育では本當の人間と云ふものを造ることは出来ないであります。是は學校ばかりぢやない。先家庭に行つて御覽になると分かる。家庭に行つて見ると、家庭にも人間が居らぬ、家庭には夫が居り、妻が居り、親が居り、子供が居り、主人が居り、下僕が居るけれども、人間は居らぬ。片つ方はどこまでも亭主、片つ方はどこまでも妻君である。片方はどこまでも親で、片方はどこまでも子供である。片方はどこまでも主人で、片方はどこまでも下僕である。だから階級ばかりが集つて家庭

と云ふものが出来て居る。本體たる人間は居らずして、階級と云ふ幽霊が集つて居る事になる。親と云ふ幽霊、子供と云ふ幽霊、亭主と云ふ幽霊、妻君と云ふ幽霊、主人と云ふ幽霊、下僕と云ふ幽霊、男と云ふ幽霊、女と云ふ幽霊が集つて居つて、人間なる本體は忘れられて、影なる階級ばかりが物を言つて居る世の中である。夫も人間なら妻も人間、親も人間なら子供も人間、主人も人間なら下僕も人間、此同じ向い人間が集つて家庭と云ふものが出来て居ると云ふ考でなければならぬのである。人間と云ふ本體はどこかへ行つてしまつて、階級ばかりが物を言つて居ては仕方がない。斯う云ふ世の中は危険至極なもので、そのお手本はどこにあつたかと云ふと露西亞にあつた。露西亞は階級ばかりが物を言つて居つて僧侶と云ふ階級、貴族と云ふ階級、労働者と云ふ階級、農奴と云ふ階級、兵隊と云ふ階級は居りましたが、人間は居りませんでした。只

だ階級ばかりが物を言つて居つた。でありますから不平満々たる社會でありました。何か機會があれば、ひつくり返る社會でありましたから、歐羅巴大戰の最中には是がひつくり返つてしまつたのであります。さればと云つて、階級と云ふものは社會に無くてはならないものである事は勿論であります、何と云つても出来て来るものであります。デモクラシーと云ふことを平等と解する人もあります、平等よりは寧ろ機會均等と云つた方が近いのであります。決して人間と云ふものは平等ではないのでありまして、人には身體の強い人もあり、弱い人もある。又非常に才氣喚發と云ふやうな人もあり、非常に鈍重な人もある。或方面の技術に就て見ても、電氣とか機械とか、造船とか、採鑛冶金とか云ふやうに、それ／＼方面の違つた仕事に、それぞれ違つた趣味、性行、技能の人々がたづさはるのであるから、結局、平等と云ふ事は出来ないのであります。

従つて此實社會は不平等で自然に階級と云ふものが出て參ります。でありますから階級を無視する考へは危険な亂暴なものであります。だから、例へば會社とか役所とか云ふものには階級がなければならぬ、家庭と云ふものにも階級が無ければならない。ところが會社に行つて見れば階級の低い者は、どこまでも上の者に屈從して居る。官署に行つて見れば所謂高等官、屬官、雇と云ふ階級があつて、すつたもんだして仕事をして居る、決して彼も自分と同じく人間である、尊い人間であると云ふ考を以て互ひに仕事をして居らない。斯う云ふやうに皆階級と云ふもののみが物を言つて居るのでありますから、社會には決して暖い血が流れて居りませぬ。

縦の文明と横の文明

階級と云ふものは當然出て來るものでありますから、別にかれこれ云ふ所はないのであります。階級の背後に、平等なる人格がある、と云ふことを我々が認めなければ本當の社會と云ふものは現れて來ぬのであります。或點は西洋にも悪い所がありますが、此所謂人格：人間と云ふものを認めて總ての社會を造る、人間と云ふものを認めて社會も學校も家庭も國家も立つて行くと云ふ點に於ては、彼のアングロ、サクソン即ち英米の社會は日本よりも進んで居るのであります。米國のルーズベルトの如き、此人は三拍子揃つた、實に稀な人物であつたと思ふのであります。即ち智慧の秀でた、道德の堅固な、精力の逞しい人であつた。此三拍子揃つて居る人は稀で、實に不世出の人と云はなければならぬのであります。此人が大統領の時に、地方巡回をして歩きます。向ふでは大統領が所謂大統領顔をして居てはいかない。人民の選舉に依てなる大

統領であれば人民に親しく接せねばならぬ。人民の了解が必要である。そこで國中演説旅行をやる。さうすると到る處、何百何千或は何萬と云ふ人が集る。汚ない様子をして居る労働者達も集つて参ります。何と云ふかと思ふと、其何千と云ふ人が帽子を脱ぎまして、「テデデー」と申します。「テデデー」と云ふのは大統領ルーズベルトの綽名であります。熊公入公と云つたやうな綽名であります。多くの人が左右から「テデデー」「テデデー」と言ふ、さうすると彼大統領が「イエース」と言つて帽子を振る。それから、大統領自身、今度は高い所から下りて来て強い握手をする。皆知らぬ人々と握手をする。假りに、一方は大統領、しかも、世界の英傑であると云ふ考があり、一方は食ふや食はずの労働者であると云ふ考が去らなかつたならば、さう云ふ親しい握手は出来ぬけれども、お互が人間同士であると云ふ點で兄弟達の様な握手が出来る、日本で

は總理大臣はどこまでも總理大臣で、階級ばかりが物を言つて居る世の中であるから、總理大臣と労働者はなかく融和しませぬ。汚ない着物の労働者が、「誰々さん」と云つて總理大臣の手を握つたら、それこそ大變なことになるつてしまふ。階級と云ふものは尊いものであるけれども、階級の背後に人間と云ふ尊い人格があると云ふ事を打忘れるから互に手を握り合ふことが出来ぬのであります。

明治の先覺福澤諭吉先生は「神は人の上に人を造り給はず、人の下に人を造り給はず」と言はれた。人間と云ふものは一律平等であると云ふことを言つて居る。神と云ふものは人の上に人を造らない、又人の下に人を造らない。斯う云ふ事が福澤諭吉先生の頭の内にはハッキリと判つて居つた。であるから、先生は華族の榮爵を興へるとか云ふことであつた時に、申す迄もなく有がたい事に

思はれたのであらうけれども此尊い人間を造り上げる爲の教育に金が欲しい、といふことであつたさうであります。ところが今日の世の中には此人間よりも尊いものが澤山出来て、人間が影を隠してしまつた。社會が物質的になつたと云ふ事は、人間よりも人間の附屬物が尊いやうになつた事だと、斯う考へれば宜しい。自働車に乗つて居るものは、自働車に乗つて居る者同士が交際をする。それは人間が交際するのではなくして自働車同士が交際するのである。男爵は男爵同士、伯爵は伯爵同士交際をする。それは男爵と云ふもの、伯爵と云ふ爵そのものが交際するのである。其人間よりも人間の附屬物が尊い世の中が物質主義の世の中でありませぬ。爵位も尊い、財産も尊いけれども、人間あつての爵位であり、人間あつての財産である。此尊い人間が集つて社會を造り、尊い人間が集つて學校が成り、尊い人間が集つて家庭を造り、尊い人間が集つ

て會社や役所が出来、尊い人間が集つて國家が出来ると云ふ、此人間主義なる考へを我々名々が持つて初めて、人らしい人が出来、社會らしい社會が出来るのであります。由來、古い文明は、物事を縦に見たものであります。上等中等下等と見た。親達が上等、子供が下等、夫が上等で、妻が下等、先生が上等で生徒が下等、斯う云ふやうに古い文明は何事も縦に觀察した。所謂アリストクラシーの文明、貴族主義の文明である。一番分り易い例を擧げて見ると、此の五本の指であります。此五本の指と云ふものは、どれが下等で、どれが上等かと云へば、それには下等も上等もない。どの指が必要か、どの指が不必要かと云へば、不必要な指は一つもない、必要な指ばかりである。けれども皆同じ指ではありません。太さが違い、形が違い、能力が違ふ。けれども、どの指も必要な指、上等な指であります。こゝであります。人間は總ての人が違つて居

る。五本の指が異なるが如く異つて居るけれども、どの人間が必要なる人間か、大切な人間かと云ふことになる、どの指も上等で必要な指であるが如く、皆必要なる人間だ、大切な人間だと云ふことになる。學者は、人間の歴史は拇指の歴史なりと申します。人間が豪くなつたのは拇指の御蔭だと言ふ。なぜなれば人間の拇指程惻いな拇指はない。是が爲め人間は色々のものを發明した。是が爲め色々のものを造つたのである。だから此拇指に向つて「拇指々々、貴様はずんぐり短く、横について居て如何にもお可笑しな奴だ」など、悪口を言ふ譯には行かぬ。そんなら小指はどうか。拇指が小指に向つて「小指々々、貴様は月足らずのやうな格構をして居つて何が出来る」と云ふ。さうすると小指の曰く「それなら、今うちの旦那が耳が痒いと云ふから、お前搔いてあげて呉れ」斯う云はれても拇指が搔く譯には行かぬ。幾ら拇指が良い指でも、拇指ばかり五

本あつても手の用を爲さない。違つた形のもものが集つてこそ、即ち此五本の指と云ふものがそれく活動してこそ、手の働きが出来るのであります。此世の中でも、さう考へて見なければならぬ。金持も貧乏人も、位の高い人も低い人も學者も實際家も名々特長を持つて居る。さう云ふ色々の人間が集つて世の中は完全なものになるのである。

職業神聖論

昔は士農工商と言つて居りました。武士が一番豪い、其次が百姓、其次が職人、一番下等なのが町人と云ふやうに、何事も上から下に敷へて居つた。であるから武士の前には農工商と云ふものは頭が上らなかつた。理窟ぢや行かない。百姓の如きは朝から晩まで肥擔桶を擔いで、寒い時も暑い時も土を耕して居る

卑しいものである。武士は一旦事有る時には國を守り君を守る者である。又職人のやうに家を建てたり壁を塗つたり、さう云ふ賤しい仕事をする者は武士とは較べものにはならない。町人などは利にのみ聰い、唯金ばかり欲しがる所の汚ない者である。だから農工商は武士の前には頭が上らない。斯う云ふ風であつた。理窟が良くても負けて居らなければならぬ。何事も上中下と云ふやうに縦に區別をして、上等の者に向つては下等の者は何にも言へない。即ち職業と云ふものが平等でなかつた。職業に階級があり、差別があつたから、従つて、どうしても職業と云ふものに對する自覺が起らなかつた。即ち先づこの縦の文明を引直して、横の文明を根底とするのがデモクラシーの文明で、士農工商を縦に見て居つたのを横にして、武士も上等なら百姓も上等、百姓が上等なら職人も町人も上等である。武士が幾ら立派な人間であつても百姓が無ければ死ん

でしまふ。幾ら武士と百姓が立派な人間にならうと思つても、職人が居らなければ雨の降る時、風の吹く時には雨に曝され風に打たれなければならない又士農工だけでは世の中の融通が付かない、そこで町人即ち商人も居らなければならぬ。それであるから士も上等、農も上等、工も上等、商も上等。上下の別と云ふことでなく相違の別となるのである。そこで、デモクラシーの文明になつて來たのであるから役人が上等なら職人も上等、労働者も上等なら資本家も上等、軍人も上等、商人も上等。詰り五本の指が違つて居つてこそ、手と云ふものが活動するやうに、世の中には色々な職業があつて、初めて世の中がうまう行く、であるからして上下の別でなくして左右の別、即ち職業を縦に見ず、横に見て初めて各自の職業に力こもり、熱出で、自覺が起るのであります。ところが、いつも御話することでありませうけれども、曾て私が電車に乗つて

居ると車掌を相手に喧嘩をして居る人があつた。日本人程喧嘩の早い人間と云ふものは少い。恐らく喧嘩早いのは伊太利人と日本人でありませう。足を踏まれたと云つては腹を立て、踏んだ方も腹を立つ、兎に角能く喧嘩をする。電車の中で車掌相手の喧嘩もする。車掌にも悪いことがあるなら喧嘩もしなければならぬでせうが、兎も角も小さいことでも直ぐ喧嘩をする。或時に車掌と二重廻しを着た紳士風の人と喧嘩をして居つた。どうも紳士の方が理窟が悪かつたと見えて負けてしまつた。車掌と雖も一個の人間であり、又大切な職務を持つて居る。不都合なことに對しては黙つて居る譯はない。そこで二重廻しの御客さんが負けた。ところが實際は仲々負けて居ない、あのボギー車でありましたが、其紳士は聲高に罵つた、「生意氣を云ふな、貴様、高が車掌の癖に生意氣云ふな」と云つた。是は我々が能く言ひさうなことであるが、是程も可笑しなことは無

いのであります。「高が」とは何だ、「車掌の癖に」とは何だ。「癖に」とは……當人は車掌のお蔭で現に電車で運ばれて居る人間であるのに、殊に理窟が悪くて負けて居るのに「高が車掌の癖に」とは何事ぞせう。「高が」とは何でせう。「癖に」とは何でせう。今日只今、電車が動かなくなつたらば東京の交通はハタと困つて仕舞ふのであります。車掌がストライキをやつたり、サポタージエをやつたらば東京の交通は開であります。それを自分の理窟が悪いのに拘らず、「癖に」だの「高が」とは何事ぞです。即ち是は職業を神聖に見ず、平等に認めなくて、職業を上下に見て居る結果であります。職業を縦に見る結果は、今の紳士のやうなことを言ふのであります。それは車掌ばかりの話ではない。例へば車夫と喧嘩する。人々は「車引の癖に」と言ふ。癖でも何でもない、立派な車引であります。職業と云ふものを縦に見る癖が我々の頭にこびり付いて居つ

て、横に見ることが出来ない。自分が御世話になつて居りながら、高がだの、癖になど、悪口を言ふ。であるから車掌の方では「車掌が居られなければ此東京の交通は眞暗になる、自分の仕事は尊い、誰が何と言つても天上天下唯我獨尊だ」と云ふ考で自分の仕事に執掌する覺悟が起らない。眞面目にやる考へが起らない。誰れが何と言つても、社會が何と言つてもやる。自分の仕事は尊いものだ、と云ふやうな確信が起らないのであります。であるから、此縦の文明を引直して、横の文明にして、さうして總ての人が獨立獨歩、天地廣しと云ふ態度で、進まなければならぬのであります。さうして初めて近頃しきりに唱へられる自治——セルフ、ガヴァーアメントと云ふ考が起つて來るのであります。總ての人を一本調子な命令服従の下に置いては、どうしても自治と云ふ觀念は起りませぬ。縦の文明では自治の觀念は起らぬのであります。之を横にし

て各自の人格を認める、各自の職業に職業格と云ふものを認めて、初めて自治獨立、自覺と云ふやうな觀念が起つて來る。そこで初めて日本の社會と云ふものが新たなる道ゆきを進めて行くことが出来るのであります。此考へが無いのが新なる道ゆきを進めて行くことが出来るのであります。此考へが無いのでありますから、例へば日本の自治制は非常に失敗をして居ると言はれて居る。國家の選良を選び、自治體の選良を選ぶ時分に罪惡と云ふものが盛に行はれて居るやうである。自治に眼が醒めぬ、自覺と云ふものが起らぬ。子供が親の脛をかちつて居る間は自治と云ふ觀念は起らぬのであります。一度親の下を離れて獨立すると、自治の觀念が起つて來るのであります。

横の文明は自覺、自治を前提とす

併ながら縦の文明を直して横の文明にすると云ふ、此デモクラシーの文明は

非常にむづかしい文明であります。自分で自分を助け治める力が無い時には、折角横に引直しても復た直ぐにひつくり返つて縦の文明になつてしまふのであります。其例は露西亞にあるのであります。露西亞は純粹な縦の文明であつたのを折角横の文明に直した所が、あの國民には自ら自らを治める力が無い。長い間の奴隸的服従の生活の爲めに獨立自尊の自覺がないから、思ひ切つて遣つては見たが、どうも、うまく行かない。もう一度ひつくり返つて、下の者が上になつて、復た縦になつて終つた。即ち労働專制、壓制政治と云ふものになつたのであります。そこで我々は今直ちに縦の文明を直して横の文明にすべきかと云ふことになるかと仲々の問題であるのであります。先程委員制度の御話がありました、實際是は餘程問題であります、力の無い者は仕方が無い。理屈は良いが力が無ければ何事も出来ぬ。我々は結局は縦の文明を直して横の文明

にしなければならぬが、直ちに横の文明にした所で治まるかどうか分らない。それだけの實力が出来て初めて治まつて來るのでありますから、目ざす所は横の文明であります、立どころに、それが出来るかどうかは研究を要する所であり、或人が非常な熱心な普通選舉論者でありましたが、横濱の波止場で或種の労働者の一團を見ました時から、今までの急激なる普通選舉論が一夜の内、にひつくり返つて、駄目だ、斯う云ふ人間が名々一票の權利を持つ事になると、どう云ふことになるか分らぬと思つて、意見が變つたのであります。さう云ふこともある位ですから、縦の文明は執着すべき文明ではなくして、横の文明にしなければならぬのですが、總てを直ちに之に直すことは考へ物であつて、實力を以て進まなければならぬ。さうして今日の思想、生活と云ふものが進んで參りますれば、職業と云ふものに對し暖か味が出来、人格に對して尊敬の念

が生れ、世の中は廣々とした氣持のよいものになつて來るのであります。先程亞米利加では又温情主義になつて來たと云ふ御話でありましたが、是は日本と同じ温情主義ではないと思ひます。私は亞米利加に六年も居りましたから、比較的其生活は能く知つて居る積りでありますが、アングロ、サクソンの文明は先づ人間を中心として居ります。資本家と労働者の關係でも比較的人間を中心として居ります。従つて、彼と、我との温情主義には違いがあります。日本では男同士が集つて議論をする時、女が口を出すと叱られる。或は子供が口を出すと、子供などに何が分かるか、いつ込めと言はれる。ところが亞米利加なと、この問題に就て質問される。「ミスター大迫、君はどう思ふ」と聞く。さうすると、我々は遠慮なく言ふ。此點は日本が悪いが、あの點は亞米利加が悪いと

云ふ。さうすると傍に居た婦人や子供が口を出す、日本ならば笑はれるか、叱られるか、相手にされぬかであるが、あちらでは一廉の紳士達が皆、ちやんと聽いて居る。女でも子供でも尊い人間であるからである。日本の家庭に我々が参りまして、例へば、御子さんが出て來る。そこで其御子さんを私が褒める、「此坊つちやんは大層お伶俐な好い坊つちやんですね」とか、「御宅の御嬢さんは大層お可愛い嬢さんですね」とか言ふ。さうすると日本のお父さんやお母さんは、「いいえ、此子はやんちゃで、いたづら者で仕方がありませんね、時には「馬鹿でございます」などと言ふ。御客様が折角褒めて呉れるのに我子の悪口を言ふ。たまには馬鹿であると迄答へる。ところが米國あたりでは御客様が「是は可愛い御嬢さんですねとか、坊つちやんですね」とか言つた時に、「いや馬鹿です」とか「お轉變だ」とは決して言はぬ。「イエス、サンキュー」――

「はい有難う」と言ふ。いくら謙遜が必要でも、日本の様に、子供を馬鹿扱ひにして仕舞つては、何の謙遜がありません。謙遜と云ふものはさう言ふものではありませぬ。さてまた其時に「宅の件や娘は、どこの坊つちやんやお嬢さんと較べましても寸分劣る所は御座いませぬ」と云ふやうに、調子に乗る必要はないけれども、丁度好い機會であるから「はい、學校の先生の仰しやることや大きい人の仰しやることを能く聞きまして、能く勉強しましたなら、必ず立派な子供、良い人間になりませう。有難うございます」と言つて御覽なさい。褒めた人は嬉しい。我が子の可愛くない人はない、褒められた親も嬉しい。更に第一、子供の爲になります。私は西洋の生活をよく知つて居る譯ではありませぬが、御客が来て子供を褒めて呉れた時ばかりは子供の悪口は言ひませぬ。ところが日本では能く之をやる。子供を馬鹿扱ひにして居る。實際は馬鹿にして居

るのぢやありますまいけれども、大人の社會は子供を馬鹿にする事になつて居る。ウイツターの教育と云ふのがありますが、之はどう云ふ教育かと云ふと、生れると直ぐに、大人扱にする、と云ふより人間扱ひにする。立派な一個の人間と観る。生れたばかりの子供にもお早うございますとか、是から散歩に行きませうとか、大人と同じ様に扱ふ。遂には、ウイツターが十五か六の時に大學の教授になつたと云ふことであります。ところが、日本では胎教と云ふやうなことを言つて、腹の中に居る内から教育をしなければならぬとさへ云ふのに、實際は生れて居る子供共を馬鹿扱にする。是は間違つて居ると思ふ。分らぬ子供でも一人前に取扱へば必ず分つて来る。であるからして、物を言はぬ前から一人前の取扱をするに云ふのが、ウイツターの教育であります。故に子供共であらうが女であらうが一人前の取扱をする。斯様に取扱方が進んで參

りますと自覚が起り、自治が始まり、立派な個人が出来上がる。斯して、さう云ふ人々が集つて社會を組織するのでありますから、社會は新しい立派な道程を行くことが出来るのであります。人格中心の温情主義には此一脈の平等味があるのであります。

社會心の涵養

詰り今日の社會は以上述べた如き意味の平等が土臺でなければならぬが、此平等を土臺にして其上に縦の文明が出来るのである。土臺は横の文明であります。其上に縦の文明を築ひて初めて立派な社會が出来るのであります。親も上等、子も上等、夫も上等、妻も上等、主人も上等、下僕も上等であつて、所謂其上等には別に違ひはないが、其以外に一種の區別を置きまして、所謂階級

の社會が現はれて参ります。さうして平等を本にした階級の社會、それが立派な社會となるのであります。而して其社會に住む人々には三つの自覚が無ければならぬのであります。それは個人たる自覚と、家庭人たる自覚と、社會人たる自覚であつて、詰り個人心、家庭心、社會心と云ふものを持たなければならぬ。斯う云ふのであります。我々自身の慾望と云ふものは強いものであります。泥棒までして自分の慾望を満たさうとするものさへある。かく個人心、個人我と云ふものは旺んなものである。ところが他人に對しては一錢の金を惜む人も、親の爲、妻の爲、子の爲なら巨萬の富を惜みませぬ。故に其人は家庭人たるの自覚、即ち家庭心と云ふものを充分に持つて居る。私共は尙ほそれを押擴めて、社會心と云ふものを持たなければなりません。それを我々が持つて初めて立派な社會と云ふものが現れて來るのであります。假に電車の例を申上

げると残念ながら日本の電車には社会心と云ふものがよく現れて居りませぬ。小さい箱の中に乗つて同じ方向に向つて行くのだから御互に譲合はなければならぬと云ふ社会心が働きますと、茲に電車の中に社会と云ふものが現れて来る。ところが、人は人、俺は俺だと云ふ考でありますれば、それは社会ではありません。群集であります。日本の電車の中には社会心が現れずして唯の群集が存在致します。ちよつとお互ひに譲合つて行けば即ちそこに社会心と云ふものがある。ところが譲合はずに、自分ばかり好ければ宜い、人は構はない、と云ふ考へであれば、それは、群集に過ぎないから、電車の中に社会と云ふものが出来ない。「徳は孤ならず必ず隣有り」で、譲合へば必ず報ひられて来るのであるから、東京の電車は、車臺は少く、箱は小さいので混み合ふのは致方もないけれど、併し社会心がモウ少し働けば、もう少しあの中が治まつて来るのであります。

す。それが無いものですから御互に迷惑する。さうして非常に醜態を演ずる事になる。或西洋人が斯う云ふことを言つて居る。日本人は豪い國民だとばかり思つて来た、成程五六十年の間にこんなに文明國になつたのだから豪い國民には相違ないが、一つ分らぬことがある。それは日本人が一人で電車に乗れぬ事だと言つた。どう云ふ譯かと聽いて見ると、車掌が聲を囁かして、どうぞ、御順に中程に願ひます、中はまだ大分すいて居ります、と言つて居る。車掌の世話になる事甚敷い、即ち一人で電車に乗れないぢやないか。斯う云ふ皮肉を言つたのであります。是は皮肉とばかり見ないで、詰り我々には社会的の訓練が足りない、具體的の訓練が尠いと云ふことを恥ぢなければならぬと思ふのであります。我々は個人心と家庭心を持つて居るのでありますから、更に是を押し廣めて社会心即ち社会人たるの自覺を強く持たなければならぬ。さすれば會社

も官署も家庭も社會も、いづこも能く治まつて行く。御互にさう云ふ考へで進めば所謂新しき良き文明が生れて來ると思ふのであります。現代人は、よく此現代精神を理解し、實感して我を知り、人を知り、社會を知らねばならぬのであります。

四 我等いづこに行く可き乎

最高の生活形式

人類が、その野蠻時代から段々進歩するに従つて、その目ざす文明生活の最高の形式は、結局自治といふことに歸着せねばならぬのである。

この自治といふことは、讀んで字の如く、自らが自らの主人となることで、それは世にいふ自主的精神を以て自主の實行を體現する所に存するものである。而して、この自治は、人間の深い本能に根ざして居るものであつて、實に人類の本願であるといはねばならない。否、人類のみならず、あらゆる動物の最深の欲求は、意味に固より深淺の左はあれど、同じく自治の生活でなければなら

ぬ。籠の鳥となつて美食に飽かんよりは、餓へて空飛ぶ自由の身となり、自分の才覚、自分の力で生きて行きたいに違ひない。

わが國に於ては、過去十數年間、デモクラシーの聲のみ獨り盛んで、眞に喧々囂々たる有様であつた。然るに今日では、健忘症のわが國民、厭き易い日本人の口からは、デモクラシーの聲は餘りきかぬ様になつたが、世界の大部分は非常な勢を以て是が實現に向つて駈々として進んで居るのである。然らば、そのデモクラシーとは何ぞや。随分長い間、わが國に於ては、之について兎角の議論が行はれたが、結局一般には未だ明確な了解がないが如くに考へられる。固より或る學者の如く、「デモクラシーとは民主政治のことである」といつて、デモクラシーを單に政治の一形式に止んとして居るものもある。又「自由平等の別名である」とか、或は「機會均等主義である」とか云つて居る人もある。か

くの如く、これ迄、デモクラシーとは何ぞや、といふ問題に對して、いろ／＼の解答が與へられて來たが、何れも一長一短あつて、未だに満足なる解答に達せず、結局デモクラシーは、分らず仕舞になつて居る姿である。

一體、デモクラシーとは人間生活の一形式で、單に政治のみにかぎられたものでなく、或は教育に、或は實業に、或は亦官公署、會社、家庭、凡そ人類生活の存する處には、生活の一形式として、その相を現はして居るものであつて、私自身では、デモクラシーとは何ぞやと云ふ間に對しては、極めて明確にして實際的な解答をなすことができると考へて居るのである。曰く「デモクラシーとは自治の事なり」。かく私は答へたいのである。とは、いふものゝ、自治といふ事も亦、わが國に於ては、これが解釋に相當の勞力を費さねばならぬ次第であつて、「デモクラシーとは自治の事なり」といつただけでは、悲しい哉、問題

に向つて問題を以て答へた憾みなしとせぬのである。

則ち茲に於てか私は更に、自治の説明を試むるの必要を感ずるものである。自治とは前にもいつた如く、人間生活が高調に進むに従つて段々明かになつて来るものであつて、或る人は自治を以て「我を失はざることである」と云つて居るが、寧ろ自治といふことは「我を獲得することである」といつた方が發達の順序から觀て適切であると思ふ。

我を未だ持たぬから、之を持つのが現代人の生活であらねばならぬ。即ち自己創造の生活をする所に自治生活があるのである。

個性の尊嚴

然らばこの自治を、現實生活に翻譯するが爲には、どうすればよいのである

か。

現在わが日本は、世界三大強國の一ツに數へられて居る。然るにその自治の生活程度、換言すればその文明生活の程度は、世界の何等國だか分らぬ位に貧弱である。勿論或る人はいふに違ひない。「我國には憲法も布かれてゐる、府縣市町村制度もあつて、人民によつて選舉せられた議員に依り政事が行はれてゐるではないか」と。固より然りであるが、それは悲しい哉、唯自治の聲や形のみには止まつて、斷じて未だ花も實もある自治といふことは出來ないのである。

そもくわが日本帝國は、二千五百有餘年間、アリストクラシーの文明を以て終始して來たものである。デモクラシーの文明を横の文明なりといふことが出來るならば、アリストクラシーの文明を以て縦の文明なりといはねばならぬ。縦の文明とは何か。命令服従の文明、上下、階級の文明の謂である。この文明

も亦無かるべからざる文明生活の一形式であつて、この點では日本は世界いづれの國に比しても遜色なしと斷言し得る。随つて、この文明に生ずる縦の道德、言葉をかへていへば忠孝の道德に至つては、我國は世界に冠たりと謂つても差支はあるまい。我等は、この縦の文明の尊い事を知つて居る。然し、すべて縦の社會は近代的意義に於ける自治獨立の精神を養成せずして、所謂、命令服從の範圍以上にいづることを許さないから、随つて自治の本源たる眞の自己に目醒める事が困難である。一方は、權力を以て命令する、他方は、その命令に服従する。かくの如き關係にある所に、いづくんど、獨立自治の社會が現はれやうぞ。縦の道德は、例へば敬の道德即ち敬して遠ざけると云つた様な道德であつて、こゝに自由激濁たる自治精神は養ひ得られないのである。これに反してデモクラシー即ち横の文明は、自由平等の文明なるが故に、所謂、隣人愛を高

調する所の横の道德を伴ふものであつて、こゝには當然激濁たる自治精神が湧いて來る道理である。我等は縦の文明、縦の道德に加へて、横の文明、横の道德を徹底せしめ、交々經となり緯となすに非ずんば、到底、眞の自治の社會を現出せしむることは出來ないのである。

かの、福澤諭吉先生が、未だ健在で、子弟教育に執掌せられて居た頃、慶應義塾の運動場の一角に小山があつて、當時の學生等が少しく離れて居る便所にゆくことを面倒がり、その小山の竹藪の中で少便をして、しかたがなかつた。いくら小便すべからずといつた様な札を立て、見ても、元氣のよい學生等は一向頓着せずに、馬耳東風に開流して顧みなかつた。そこで福澤先生は、或る日のこと考へて、「犬の外小便すべからず」といふ立札をたてた。そうすると、その日から二度とそこに小便する學生が居なくなつたと云ふことである。是れ實

に命令服従の縦の教育によらずして、學生に自覺を興へて、自らが自らを治めるといふ所謂、横の教育に訴へたものであるといはねばならぬ。即ち、もし自分、こゝに小便をするならば、自分は犬だといはれても仕様がな、自分は犬じゃアない人間だ、といふ自己覺醒が起つて、即ち人間の尊嚴、人間の價値を認めて自重し、自治するに至つた次第である。此精神即ち自治の本能に目醒めて、こゝに所謂自治の根柢がなければならぬ。大なる自治の根柢は人間の價値の自覺より來るものである、その人間の價値の自覺は、更に個人の自覺、個性の尊重といふ所にその源を有するものである。

人間の有する此の個性は、實に人間獨自のもので、例へばこゝに百羽の鳩が居つても、いづれも我は我なりといふ特別の自覺を備へ、個性を以てゐるものは居ない、十匹の豚がゐても、彼等にも又個性の自覺はない、更に犬の如き、猿

の如き高等動物に至つても又、太郎とか、シヨンとか呼ばれるれば、漸く我の事なりといふ位の極めて輕き個性的自覺しか持たない。然るに人間に至つては、全く之と異なり、獨自の個性を完全に備へて居るものであつて、顔こそ聊か貧弱ではあれ、からだこそ小さくこそあれ、この我といふものは、天下に二人とない尊い個性の所有者である。かねの草鞋を履いて搜しても、此の世に二人とない、否な未來永劫に再び世界に現はれて來ない所の、實に天下一品の我である。即ちこの世に生存してをる各個人、世界拾七億の人々は、何れも天下一品たる點に於て同一である。

我も天下一品、君も天下一品、こゝに無限に尊い個性を備へてゐる人々が、共々に生存することになる。これを眞の意味の個人主義と云ふのである。個人主義とは、己の權利を主張すると共に義務を履行する、又他人の義務履行を要

求すると共に其の権利を尊重するものである。何となれば我も天下一品、君も彼も亦天下一品であるからである。

白に咲くのも黄色に咲くも

同じ世に咲く花ぢやもの。

君は白と咲き、我は黄色と咲き出でても、皆同じく此世に咲き出でた花ぢやないか。上もなければ下もないのだ。皆平等一律、各々天下一品と云はねばならぬ。

斯くして自覺起り、獨立の精神旺んにして、従つて自治の實を現はすに至るのである。

社會我の徹底

斯くの如くして、私は始めて眞の社會の芽生があると考へる。天下一品の人が集まる。こゝに本當の社會、即ち人格關係の社會が現はれて來るのではあるまいか。かくて眞の個人主義は眞の共同主義であると斷言して差支ないことになる。念の爲にいふが、日本人は個人主義を利己主義とはき違へる癖がある。然し兩者は斷じて同じではない。否天地の差異がある。

人間は、アリストートルの言葉を保つまでもなく、社會的動物である。天下一品の人間が相集つて茲に本當の社會が現はれる。然も社會なくして個人はない。何となれば、我等は社會を離れて個人の存在を考へることが出來ないからだ。突詰めて言へば、社會なくして生活はないのである。「思へば親鸞一人が爲なりけり」親鸞はつくづく考へて見るに、自分が今日斯様に生きて居ることは、何ともいへぬ大きなこの世のお蔭である。實に此の世、此の社會は、この親鸞一

人の爲に、どれだけ生みの苦しみをなめて居るか計り知られぬ。言葉を代へていへば親鸞が、この社會、この世の中に負ふてゐる責務は、どれだけ大きいかわらぬ。斯くも廣大無邊な世話になつて居る我身を省みれば、この世の中はまさしく親鸞一人の爲に出来て居るものとしか考へられぬ、とかやうに、この偉大なる人格者の胸には響いて來たのである。されば「思へば親鸞一人が爲めなりけり」とは、此の世の中は親鸞一人のものだ、と云ふやうな利己主義の考へから出たものではなく、實に言葉にも筆にも言ひ表はされぬ位に、親鸞は此の世のお世話や御恩になつてゐる。どうも、ひと様より此の親鸞の方がこの世のお世話になつて居るやうだ。親鸞一人の爲にかくも多くの苦しみや面道を此の世の中に興へてゐる。あゝありがたいことだ、又實に恐れ多いことだと。親鸞の偉大なる心は感恩、喜悅、恐懼の情に充ち溢れたのであつた。

併し私共は、之を以つて親鸞一人の言葉のみと思ひたくない。我々めいも、同じ様な偉大な感恩奉仕の一念を我等の胸に宿したいものと思ふ。社會なくして個人なし。我等の獨立の個性即ち天下一品の我なるものは、わが住む此の社會によつて造られたものであるのだ。

茲に於てか眞の個人は眞の社會人でなければならぬ。眞の個人我は眞の社會我に一致すべきものである。則ち茲に社會連帶の事實が嚴として存在することを痛感するのである。かくてこそ、我等は眞の社會を創造し、同時に眞の個人に對つて來るのである。然らば則ち今ぞこゝに眞の個人の自治が現はれると同時に、眞の社會的自治が顯現して來るではないか。「自治を離れて吾人に樂土なし」あゝ「自治を離れて吾人に樂土なし」實に吾人は完全なる自治の生活に入つて、始めて自覺ある歡喜に甦り、隣人愛、人類愛を以て社會連帶を實現し

自主自治の生活を送ると共に社會の一部分としての社會人たるの強き自覺を喚起し、理性の命ずる所に従つて、權利を主張し、義務を遂行すべきではないか。否な、斯なれば權利は即ち義務であり、義務は同時に權利の別名に外ならずとする眞人の生活を體現するのである。之ぞまことの自治に外ならぬのである。我等はいづこに行くべきか。文明生活最高の形式たる自治の樂土に行く可きである。

五 現在主義の新提唱 (其一)

感激は青年の獨占

北條早雲が、未だ一介の布衣、其存在や、當時の血腥き社會に、何等の波紋を呼起すに足らぬ一青年の頃、或日箱根の山に登つて、見渡す限り茫漠として際涯を知らぬ太平洋を眺めた時、青年早雲の胸は感激に躍つた。彼は海の雄大なる相、その浩蕩として悠久なる態、その含蓄や、底深くして計り難きに、心魂を奪はれたのであつた。「男子須く斯の如くならざる可からず」と叫んで彼は感激に満ちた眼で、海に見とれて居た。あゝ是ぞ、早雲が見た青年の夢ではなかつたか。實に、後年此夢の主は、關八州を従へるに至つたのであつた。

感激は青年の獨占である。大自然の呼ぶ聲に應じて、早雲はひたすら人生の森深く分入り、關八州を擱んだのであつた。

聽え來る大自然の聲

米國の或地方に居た一匹の飼犬が人に盜まれて、流れ流れて、北はアラスカの荒野に迄連れ行かれた。人跡稀なる太古の姿其儘の、アラスカに住み馴るに連れ、犬は何萬年かの、人間界に飼育された習性を失つて、段々野性を帯び來り嘗つて森林を放浪した其の祖先の生活——何ものとも知れぬ其祖先の生活が、わが血管に甦り、得も云へぬ一種不思議の憧憬を感ずるに至つた。我物ならぬ我身の過去が、現在の此我身にヒシと迫つて來る。過ぎし永劫の昔、祖先の嘗た經驗が生々として我身に感じられて仕様がなない。幾萬年か幾十萬年かの彼

の背景が、彼の眼前に展開されて來る。彼は此神秘なる影に追はれ、つき纏はれて狂はんばかりとなつた。靜かに閉耳を立れば、何所からともなく我を呼ぶ聲が傳はつて來る。其聲は未だ嘗て聽た事のない、なづかしい聲である。蜜の如く甘き聲である。何かは知らず我胸を貫かんばかりである。心の髓迄沁込まんとする。犬は狂氣の如く其怪しき聲を慕ふて小屋を飛び出せば、其聲は森の奥深くから聽えて來る聲であつた。彼は其聲を求め森の奥深く分け入り、慕ひ求めて、驅け廻つた。時には忽然として眠より醒め、眼光は輝き、立髪は逆立ち、聲のする方角を指してひた走りに走つた。月光の下、耳を澄せば遙かになづかしい聲は聽えて來る。或時は近く、或時は遠くに聽える。不思議や其聲は彼の心のどこかに覺えのある聲である。どこか此の世界ならぬ他の世界で聽た事のあるやうな聲であつた。

實に、犬の求めて止まぬ其のなづかしい聲は、森の奥深くに住んで居る彼の祖先なる山犬の聲であつた、然り、言葉を換て云へば、清新潑刺たる自然の聲、幽玄深刻なる大自然の呼ぶ聲であつた。犬はつひに聲の主を求めて、之に會ひ無限の歡喜、深大の満足を感じたのである。

是は、先年死んだ米國のジャック、ロンドン氏の傑作「曠野の招き」の中にある話である。

我等も又、犬が森の奥より響き來れる聲に耳を澄したるが如く、心の山、靈界の林、社會生活の内、扱は森羅萬象の奥深き所より聽え來る大自然の聲に耳を傾けねばならぬ。

深奥なる感情の持主は青年である。其青年の胸には斷ず理想の焰が燃えて居る。耳を澄せば我を呼ぶなづかしくも強き聲は、どこからともなく聽えて來る。

あゝ、止むに止まれぬ青年の此幻は（ビジョン）、之を如何に導けばよいのであらうか。如何にすれば之を實現する事が出来るであらうか。

非常なる心得違ひ

九州の去る田舎に育つた一青年が、中學の課程を卒て、東京の學校に入らんが爲め郷里を出發せんとするに當り、恩師を訪ふて別辭を述べた。恩師は、其教へ子の一人が學びの旅に上ぼるのを喜び、且つ問ふて其心組、其決心をたゞした。青年は東都の遊學に勇み立つて、恩師の間に答へた。「君は東京は何の學校に入學の積りか」「早稻田大學に入る積りです」「何を勉強するのだ」「法律と政治です」「法律と政治を勉強して、どうするんだ」「文官高等試験を受けて高等官になるんです」「高等官になつて、どうするんだ」「高等官になつて、豪い役人になるんだ」

なるんです」「それから、どうするんだ」「代議士になるかも知れませんが」「代議士になつて、どうするんだ」「大臣になるんです」。青年は、モウ、既に郷國を出る前から、大臣になつた積りで平気で、トン／＼拍子に答へた。すると、今迄静かに問ひ且つ聽いて居た恩師は、忽にして眼を怒し、大喝一聲、「馬鹿！」と叱咤した。青年は餘りの突然に譯が分らず、怪訝な顔をして眺めて居ると、恩師は諄々として説き出した。

「君は其様な心掛で東京に行つた所で、成功は覺束ない。君の足は、地に着いて居ない。君の心は、眼前の事を忘れ、遠い先の事ばかりに熱中して居る。多くの青年が失敗するのは君と同様な考へをして居るからだ。君は人間の一生は思つた様に手輕に行くものだと思つてる様だが、仲々さうは行かぬ。君は成りもせぬ中から成つた様な氣持をして居る。君は現在よりも將來に心をつかつて

居る。それが非常なる間違だ。目的を懐くなど云ふのぢやない。大志を捨てよと云ふのでもない。理想に生きるなとも云はない。目的も大志も、理想も結構だが、未だ握りもしない、さう云ふものにのみ憧れて、現在を忘るゝのが悪いと云ふのだ。君が東京の學校に入つたならば、將來に力瘤を入れる事は大抵にして、學生と云ふ現在を大切に守れ。立派な眞面目な學生であれ。いくら大言壯語して見た所だ、學生として不眞面目で、成績が悪かつたならば、何にもならぬ。人間はいつの時でも現在が一番大切だ。忠實なる現在なくては、大志も理想も何の役にも立たない。君が、こんな事がしたい、あんな人になり度いと思はんでも、常に現在に忠實であれば、獨りで立派な事も出来、豪い人にもなれる。忠實な草履取であつたればこそ、秀吉は聽て天下を取つたのである。」云々。

餘りに將來を祝し過ぎる

右の青年は今、希望に燃へ、所謂、志しを懷て郷關を出んとして居たのであるから、目的や理想などは、現在あつてからの事だ、と云ふ恩師の説法がよく腑に落ちかねた。併ながら、此恩師の語は、後に到つて、よく噛占めて見た時それは甚だ意味深いものであつた。青年は有望なる將來がある、多望なる未來を持つて居ると云ふ。之は必ずしも間違ではないが、之から多くの間違が起るのを注意しなくてはならない。青年には多望なる未來、有望なる將來があると思つて將來を喜び、楽しんで居る間に、いつの間にか現在が、おろそかになりたがる。是迄の東洋の教育は徒らに青年の將來を祝し過ぎ、將來に期待し、將來に花を持たせ過ぎた結果、多くの青年は、滔々相率ひて大言壯語の徒となる

か、空想を喜ぶ者となつて、現在の大切なる事を打忘れ、青年時代を空費して遂に一生なすなきに終らざるを得なかつた。今日でも、斯る教育を施して得たる輩多く、又斯る空想に現を抜かして得たり賢しとする多くの青年を見るは、洵に寒心の至りである。

刹那を活かす生活

茲に於てか、青年の夢、其の尊い幻、その理想、その感激、其深奥なる情感、その琴線を打つ大自然の呼ぶ聲は、皆な之を現在に活し、現實に即せしめねばならない。青年の有する此等の含蓄は、外に發せしむると同時に内に喰入らしめねばならない。青年早雲の海を見ての感激は、之を着々現實に活し、現在に奮闘せしめて、始めて、關八州を我物にした。獅子吼ゆ、誰か豫言せざら

んや、と叫んで立つたアモスは、絶へず其大なる聲に導かれて、一意現在の使命に忠實に働いた。

青年には有望なる将来があると見るは、将来に對する感激を表すものであるが、之を現在に活して見れば、青年には有望なる現在、多端なる現在があると云ふ可きである。總てが有望なる現在、多事なる現在である。青年の希望やその理想は、之を現在に繰込んで緊張味あり、活氣ある生活を打開す可きである。久遠を刹那に活すのである。刹那なくして久遠はあり得ない。久遠を胸に疊んで刹那を活かす所に、人世の理想と現實が握手するのである。

現在主義を勧む

私は、東京市七萬の青年團員諸君と密接な關係を有するものである。追々

十萬、廿萬にもならんとして居る青年團であるが、私は此團員諸君に向つて私の意見の發表を望まると毎に、私の所謂、この現在主義を語るものである。現在主義は、云ふ迄もなく現金主義でもなければ一時の快を追ふ刹那主義でもない。又現在に甘んずると云ふでもない。現在に徹底するのである。即ちベストを盡して現在に處するのである。幸福なる明日を欲するならば最善の今日を送らねばならぬ、結構な明年を持ちたいならば、今年を輕んじてはならぬ。愉快なる將來を得んとすれば、現在を大切にせねばならぬ。今と云ふ今、今日、今年を無駄にしては結構な將來も明日も明年もあり得ないのである。學生たる今、小僧たる今、下廻りたる今、貧乏なる今、修養の不足なる今、身體の弱い今、此今、と云ふ現在を徒らに過しては、學者にもなれず、智慧も出ず、立派な主人にも成れず、上役にもなれず、金持にも成れず、人格も出來ず、健康も得ず、

遂に一生不平不満に終らざるを得ぬのである。現在なくして将来はない。将来は現在より生れる。最善の現在は、求めずとも最善の将来をもたらず。各自が現在の立場に努力し徹底せば一舉にして精神の修養と物質的成功の兩者を獲得するのである。

現在主義は、我等の日常生活を深大化せんとするものである。總ての瞬間を充實せんとするものである。之に依つて、青年の理想も感激も歩一步現實味を帯びるのである。将来が現在に活躍するのである。久遠が刹那に充實するのである。

雪達磨は、轉がすに従つて、太るのである。人間生活も、總ての現在を通過し、之に徹底して始めて、擴大されるのである。創造的進化である。徒らに將來を急ぎ、理想にのみ憧れて一足飛を夢見ると、雪達磨は依然として、瘦達磨

の域を脱し得ないが如く、我等も又いつ迄も吳下の阿蒙たらざるを得ないのである。理想や目的は向ふにあるのではない。こちらから作りつゝ進むのである。希くば、青年の理想を、其夢を、其強き情感を、其胸に響き来る大自然の聲を現在に活して、力ある、健實なる人生を打建てたきものである。

千里行かうか、五千里行こか、

まゝよ足もと一歩の中に

通ふ萬里の路はある、

仲小路廉氏は青年に向つて「自分は檢事の時は天下第一の名檢事にならうと思つて努力した。それ以外の事は何も望まなかつた。參事官の時も唯だ天下第一の名參事官にならうと思つて奮闘したばかりで、それ以外何も考へなかつた。次官になつた時も大臣になつた時も同じ事で、唯だ現在の職務に忠實に働いただけ

であつた。自分は、世に云ふ様な目的とか理想とかは必要のないものだと思ふ。唯だ一意、現在に忠實であればよいのだ」と話されると聴く。加藤高明氏も又同様な事を云はれるさうだ。成程、仲小路氏と云ひ、加藤氏と云ひ、人生五十六十の坂を上ぼつて、或時は悪戦苦闘、或時は善戦善闘の後、人生の一の峠に立つて回顧せられる時、實に人生の有爲轉變を感ぜられ、青年時代の目的とか理想とかは、つまりは一場の夢に過ぎずして、決して人生は、思つた通り一直線に行くものに非ず、海上に吹荒る、低氣壓のその如く、思はざる針路を取つて進む事の常なるを痛感せられて、唯だ一意、現在に奮闘するの唯一最善の道なるを深く意識経験せられたものであらうと思ふ。是、尊い實感であり経験の聲である。去り乍ら、人生の一の峠に立つて振歸つて見る相當年輩の人々としては、勿論、斯くある可きであらうが、青年に取つては、理想や目的は

固より大切である。されば唯だ、其理想、其目的を現在にいかす事を忘れてはならぬ。常に現在に最善の努力を拂ふ事を怠りながら然かも理想を懐き、目的を定めて見た所で、それは夢を語る者に過ぎぬ。嗚呼、現在奮闘なる哉。總ては現在より生れる事を深く念頭に刻み置く可きである。

徒らに千里の先きを望み、五千里行かんことを論ずる勿れ。只だそれ、汝が踏み出す一步の中にこそ、通ふ萬里の路はあるのである。現在即久遠、一步即萬里ではないか。

六 現在主義の新提唱 (其二)

現在は將來の手段に非ず

私は前段に於て、現在主義の一面即ち最善の現在是最善の將來を獲得する所以の道理を説いた。即ち將來は現在より生れる、従つて大なる現在は、大なる將來を齎らす事を述べ、現在を以て大なる將來の準備たる所以をも力説した。即ち我等の理想や、目的を達せんが爲めには着々之を現在に活かし、現在に徹底せしむるの必要を説いた。併しながら、之は現在主義の一面であつて全體ではない。勿論、尊い一面ではあるが、更に吾人の現在主義には第二、第三の意

義ある事を忘れてはならない。然らば先づ、現在主義の第二の意義とは何ぞや曰く、現在を以て只だ單に將來の爲の手段や道程であるとのみ考へず、従つて現在を以て將來の犠牲とする事なく、現在は之を將來なる觀念から引離し、之を全體から切離して、其の部分々々に於て、現在を獨立せしめて之に無限の價値ありとする。是れ現在主義の第二の意義である。例へば丁稚と云ふ現在、小僧と云ふ現在、番頭と云ふ現在、學生と云ふ現在、雇人と云ふ現在、即ち其の現在の仕事、現在の職務は、單に將來の大を成さんが爲めの手段のみと考ふる事なく、其の現在の職務は之を獨立せしめて無上の價値あるものと考へねばならないのである。一體之までの教育の言草は、現在やつて居ることは、辛い苦しい事であり、或は無趣味でつまらぬ事かもしれぬけれど、何よりも辛抱が大切、我慢してやるが肝心、何事も將來の爲だ、成功せんが爲めの手段方便であ

るから我慢して働かなければならぬ、と云ふのであつた。青年自身も亦其様に信じて努力して来たのであるが、之が實に大なる間違ひである、と云はねばならぬ。

現在やつて居る仕事は、つまらぬ事ではあるけれども何事も將來の爲め、何事も経験である、と云ふ事が正しいならば、是れ實におかしなものではないか、何となれば、自分が今やつて居ることは、つまらぬ、不愉快なものだけれども將來の爲めだと思つて働くのであるから、現在には何の楽しみなく、光なく、只だ、あるものは不平であり、不満であらねばならぬからである。自分の現在の仕事は之を愉快にやる事なく、只將來の爲めに辛抱我慢してやつて居るのだと云ふ事であるならば、其仕事には熱情なく徹底味なく執着力なく、碁に云ふ捨石を打つて居るに過ぎないのである。結局、止を得ずして、辛抱しつつ、努力して居るのであつて實に馬鹿げた世渡りと云はねばならぬ。誤れるも又甚敷き人

生生活ではないか。我等は直ちに、斯る誤謬を一蹴し去つて、現在主義の第二の意義を味讀し、斷じて、現在を以つて、將來の犠牲とし、手段とし、道程とするが如き事なきを期さねばならぬ。

常に現在に獨立價値を認めよ

眞面目なる小僧は、忠實なる番頭となり、忠實なる番頭は立派なる主人となるのであるが、しかも其の到達點にのみ光明があるのではなく、其の小僧と云ふ仕事、丁稚と云ふ仕事其物が價値あり、意義あり、力あり、光ある生活である。よし主人になれずとも、必ずしも悲觀する必要はないのである。

陸軍少尉は、中尉に昇る手段であるばかりではない、固より、少尉と云ふ現在に全力を盡す人は中尉にもなれる人であらう。併し、よし中尉になれずとも

現在の少尉たる其の職務が此上もなく尊いものであると云ふ様に考へなければならぬ。繰返して云ふが、現在は將來の爲めの手段のみでもなく、道行きでもない。現在そのものに絶対の價値があるのである。世に所謂、立身せずとも出世來ずとも我等の人生は意義深きものである。

我日本人の癖として、尊い現在を以つて、將來の爲の手段であり、方便であり、道程であるとのみ考へ、目的なくして手段はなく、理想なくして道行きはないと思ひ誤るのであるが、之は所謂、曲の妙味なくして直の外何事をも知らざるものと云ふべきである。或る人は是を以て日本人に科學なしと云ふのであるが亦一考せねばならぬことではないか。子供は大人になる爲の手段ではない。されば子供の爲の子供の教育が必要である。子供の時代をして大人たる可き時代の爲の犠牲に供してはならない。青年時代はそれ自身に尊い價値を有

して居るのである。大人たる可き爲の手段でなく、それ自身又目的でなければならぬ。

吾々が山に登ると假定して見よ。一氣呵成的に頂上に登らんとする。即ち何等心身の疲勞を顧みずして、無性矢鱈に山の頂上に達せんと焦つて、其の結果は頂上に至らんとする途中の風景全部を無視し犠牲にする。途中の快味を知らず、獨立價値を發見する事なくして只だ徒らに之等を手段とのみ考へて、一意山の絶頂に達せんことをのみ望んで居る。

幸に目的は達し得られても身心共に全く、疲勞してしまい、地上に身をなげ出して青息、吐息の體たらくである。斯の如き山登りたるや、まことに、下手の兵法と云はねばならぬ。之に反して、總ての現在、換言すれば、その道行に無上の價値を發見せんとするもの、山登の方法は、山の頂上に至らんとする

途中をして、意義あらしめ、趣味あらしむるものであつて、裾野にあつては小川の清き流れに興趣を催し、森林に歩を進めては、木陰にて冷風をあび、山腹に登りては、除々展け行く景色を賞し、顧みては深谷の靄に一層の興味を引かると等、歩一步の中に登山の樂みが盡きないのである。途中を無視し、只だひたすらに山上の遠眺にのみ夢を走らせ、足をいたため汗を流しつゝ、絶頂の外何物もなきものに反し、山に登りつゝ、途中の現在を樂しみ、一步の意義を味ひつゝ、決して途中を犠牲にすることなく、その途中をして、力あらしめ、興味あらしめんとする、是れ現在主義の唱導する所に外ならぬ。而して頂きに近くに從つて勇氣百倍し、將さに、頂上に達するに及んでは、満身の意氣凛々たるものがあるのである。然かも又必ずしも人生は頂上を極め得べきものにもあらず、又必ずしも極めねばならぬ事もないのである。丁稚の仕事、番頭の職務、

労働者の働き、雇人の日課、總て其の現在に最上の價值ありと信じて奮闘しなければならぬのである。

一生を棒にふるな

米國に労働しつゝある日本人の中には、實に十年二十年三十年と云ふ月日を無性矢鱈に働いて、幾萬圓かの金を懐にして、而して安樂の生活を送らんものと勵んで居る人が尠くない。

其の十年二十年三十年間は極度の儉約をし、極端なる働きをして肉體や精神は半ば損傷するをも顧みず、二度と來らざる此尊き月日を犠牲にして仕舞ふのである。單に將來の爲の手段にとゞまり、之に何等の獨立的價值を發見しないのである。即ち十年二十年三十年と云ふものを將來の爲に葬つてしまふのである。

る、誠に惜みても餘りある次第ではないか。

而して更に一步を踏み込んで考へて見れば、斯くも長年馬車馬の如く働いて、今まさに、いくらかの金を懐中にせんとするに當り、不幸、此の世を去らんか、全く一生を棒に振つてしまつた事になるではないか。愛んぞ知らん、我が日本人の多くも又、全く之と同じく、常に現在に價値を發見せず、現在の職務に全力を傾注し得ず、従つてその大多數は、望む彼岸に達することなくして、黄泉の人となるのではないか。

それ即ち目的を達し得ざるが、人生の常であるから、現在に意義を發見せざる多くの人は遂に一生を棒に振つて仕舞ふのである。これ實に大なる心得違ひであつて、一生の大損失であると言はねばならぬ、願はくば、吾人をして現在の仕事を、將來より引離し、理想、目的より分離して、獨立せしめて之に無限

の價値あるを確信せしめよ。而して吾人をして、喜んで現在に努力せしめよ。

昨今、しきりに、各種の同業者組合従業員表彰式が擧げられ、私も屢々其の席に列するの光榮を荷ふ次第であるが、或る人は十年、或る人は二十年、或る人は三十年、或る人は、四十年一日の如く、立派なる番頭、立派なる店員なるが故を以て、目出度い表彰を受けるのである、實に名譽の事と云はなければならぬ。

然るに其の番頭の仕事、其の従業員たるの職務は、たゞ、やがて獨立すべき手段であり、主人となるべき道行であるとするならば、實に二十年三十年、四十年の奉公生活は、光なく、意なく、興味のない失敗の生活であると云はねばならぬ事となる。然るに事實は之に正反對であつて、一生涯を番頭として送り、奉公人として終るとも、其の番頭たり、奉公人たる現在の仕事そのものは

世の中が不景氣になるに従つて、多くの失業者が現はれて来る。失業者其の人々は勿論のこと、失業せざる人々も亦何とも云へない恐怖の念におそはれるのである。或る時は軍備縮少の爲めに多くの將校は其の職を失ひ。或る時は官衙公署の官公吏が行政整理の爲めに其の職を免ぜられる。或る時は、亦事業不振の故を以て會社工場より、多くの失業者を出すこともある。これ等の失業者其人々の孤獨、寂寥、悲哀、失望の念は云はずもがな、之を傍觀するものや、未だ其の地位を保てる者も又、そゞろ悲觀せざるを得ないのである。居亡びて齒寒し。斯る場合に於ては、人も吾れも共に人生の頼み甲斐なきを痛感せざるを得ぬ。然しながら更に深く考へて見れば、斯くの如きは必ずしも一部人士にのみ限られた運命ではない。

昨日は成金の花を咲かせた人も、今日は實に成金の憂きめを見て居るではな

いか、昨日までは天下を支配した原總理大臣も不幸、青年の刺す處となり、今日は幽明處を異にして居るではないか。既に昔より佛教で唱へて居るが如く、人生は皆な無常なのである。朝を以て夕を計ることの出来ない、今日を以て明日を知る能はざるものである。辭書の中より不可能の文字を抹殺せんことを叫んだ彼れ大ナポレオンも、セント、ヘレナの配所の月に無常の涙を絞つたではないか。昨日までは陸軍大將と崇められた西郷隆盛も、今日は城山の露と消えたではないか。然らば即ち人生は誰れも彼れも皆無常なのである。奚んぞ、或る種の人々のみ、この世の有爲轉變を慨くべきであらうか。

然らば即ち斯る、はかなき人生に處して、吾等は如何にすべきであらうか。深山に隠れて人生の無常を嘆ずべきか、華嚴の流壺に投じて身を殺すべきか。然らず、吾等は唯この無常の世に處して、朝を以て夕を計られざる有爲轉變の

世に處して、吾等の唯一の足場は、即ち之を現在の外に發見する事は出來ないのである。唯、現在に徹底せよ。現在は即ち一切萬事を生むところの力である。

現在にこそ極樂があり、天國がある

我等は、常に人生の先頭に立つて進む處のその現在に徹底して、荆棘を排して突進すべきではないか。人生には過去もなければ、未來もない、唯あるものは現在のみである。

然り現在は人生の總て、あるのだ。我等の安住の地は過去でもなければ、未來でもない。唯現在あるのみである。然らば吾人は、この現在に我が安心立命の地を發見すべきではないか。

明日は幾百萬年たてども之を捕ふことは出來ない。只だ常に現在あるのみである。現在に徹底せよ。現在に光明を認めよ。人生は諸行無常ならむも、吾等は悲み憂ふるに足らない。人生は流れゆく水の如く所定めぬものならむも、決して悲観するに當らない。常に現在に徹底すれば可なりである。汝の兩足を現在てふ大盤石の上に置け。そこに人生の救ひがあるのだ。我等は遠くに救を求むる必要はない。救ひは只だ現在にあるのみである。即ち知るべし、吾等は今の現在に徹底して、現在の仕事、それが即ち吾等の安住の地、救ひの場所である事を忘れてはならぬ。神の國の一日は此の世の千年に勝る。現在生活の徹底、是れぞ神の國に住むの謂ではないか。

人生は流るゝ水の如くである。流れて止まぬ人生の面に現はるゝ現在のみは常に明かな實在である。現代人の信仰はこゝにその立脚地を置くべきである。

吾等は未來の天國を語らない。死後の極樂をたのまない。借問す、天國や極樂は何處にあるのであらうか。過去か、未來か。然らず吾人には過去もなければ未來もない。唯あるものは、現在のみである。然らば現在にこそ極樂があり、天國があるのである。然り。迷ふなかれ。汝の足下の現在に、天國も横り、極樂もあるのである。

嗚呼、現在なるかな。活眼を開いて現在を凝視せよ。而して吾人はこゝに徹底し、獨往千里、岸を離れ太平洋の怒濤の如き勢を以て、つねに我等の生活の旅路の先頭に立つ現在を我がものとし、こゝに我等の最善の努力、我等の信仰と熱と血と涙とを注ぐべきではないか。こゝに哲學もあり宗教もあるのである。

(完)

八 運動體育の生活化を論ず

社會教育の根本義

今日は、所謂、學校教育以外に社會教育といふことが非常に盛んに唱導せられる時代となつた。従つて、その社會教育と云ふものは一體如何云ふものであるかと云ふやうな質問を受くることが屢あるのである。

社會教育は、人間の社會が存在して以來は斷へずあつたもので、少しく歴史を調べて見ると實際は、古來賢君とも云はるべき人々は、皆此社會教育に重きを置いて居たものである。然らば社會教育とはどう云ふことをするものである

か、細目に亘つて列擧せんとすれば、其例や無限で、到底枚擧に達しないのであるが、昔は問はず、今日我等が社會教育として最も力を込めて説き度いと思ふ事の一つは、體育と云ふことである。市民の體育や國民の健康を向上洗練せしむることが健全なる社會を作る上に於て、大切な根本義である事を辨へて、ここに我等の注意と努力とを傾けたいものと思ふのである。

日本國民の偉大性

日本國民は實に驚嘆す可き國民で、僅かに、今より六七十年以前に擡頭してよりは旭日滔天の勢を以て勃興して來た。小國ではあるが、宇内にその名を轟かし、最近世界戦に参加して、その結果、巴里の晴の舞臺には、所謂五大強國の一に數へらるゝに至り、更に米國大統領の主唱に依つて集まつた華盛頓會

議では、世界三大強國の一となり。此世界てふ屋臺を支ゆる三本の柱の一に擧げらるゝ盛運を贏ち得たのである。

此日本の大發展たる、我々が假りに第三者の位置に身を置いて公平に考へて見ても、たしかに驚くべき事實である。日本人は、僅に五六十年以前には、黒船を見て周章狼狽した國民であつた事を考へて見れば、我等は、こゝに日本人の偉大性を疑ふ譯には行かないのである。

今日の日本が、斯くの如く大をなしたのは固より此國民性が其の基礎をなしたのであるが、然し一方から云へば、今日の盛大の因たるや、實に又歐米文明の恩澤による事多大なるは、何人と雖も否む能はざる事實である。過去半世紀間、我日本は歐米文明を追ふに日も亦足らないと云ふやうな状態であつたのである。

それで今日では殆んど遺憾なく歐米の文明を採用してゐると云ふことが出来る。勿論、燦然たる歐米の文明を悉く吸収して、今や、全く彼と同一であると迄は行かないが、先づ大體に於て彼の文明は我々の生活と密接不離のものたるに至つたのである。

この事に就いては、歐米に關して彼是是非を問ふ人と雖も承認せざるを得ぬ事であつて、兎にも角にも歐米諸國は我々の先進國であり、恩人であると云はねばならぬ。

體育の生活化を圖れ

斯く日本は、歐米の文明を追ひ、盛んにこれを採用したが、然し又取り落したり、忘れたりしたのも一二あるのである。

その一を挙げれば即ち體育である、斯く云へば或る人々は、日本にでも體育はある。既に兵營内でもそれを行ひ、學校教育に於ても、小學校、中學校、或はそれ以上の學校で歐米流の兵式體操や其の他の體育法を行つて居るし、その外、種々なる運動競技も盛んに行はれて居るから、體育は決して忘却されては居らぬと云ふかも知れない。

然し、私は斷じてさうではないと考へる。歐米から來た汽車や電車は確に我々の生活の一要素となつて居る。電燈、電話、瓦斯と云ふやうなものも亦我々の生活に取り入れられ、その他のものも殆んど皆我々の生活中に食ひ入つて、我國民の中に生活化して存在して居る。然るに拘らず、體育と云ふことのみは決して未だ生活化して居ないのである。歐米の體育は、今日の彼の文明を作る大切な要素であつたのに、日本ではそのことのみは全く閑却されて居たのは残念

である。

運動は少青年のみのものか

成程、小學校や中學校に行つて見れば、一週間五六時間、他の學課と共に體操の時間が取つてある。又兵營に行つて見ても、兵士は二年若しくは三年の在營期間中、殆んど全部體操と云つた様な事に日を過ぎて居るのである。

然し、一步營門や校門を出れば、營内又は校庭で學んだ體操は、殆んど其影さへ失つてしまふのである。例へば體操では歩調を合せると云ふことは共同動作の第一の條件であるが、街路を歩いて居る兵士や、校門を出た生徒を見れば既に其歩調は亂れて居る。然らば即ち彼等の體育は或る場所に於ける或時間内に行はれる丈けのものであつて、これが生活化されて居るとは何としても云

ふ事は出来ないのである。

その他一般人の所謂運動とは、概して少年青年のそれである。今假りに白髮の老婆が若い男女に交つて、テニスを試みるとせんか、人々はそれに對して如何なる態度を取るであらうか。恐らくそれを嘲笑し、理解のない罵倒を放つであらう。何となれば運動は子供や若い者のやる事としか一般に考へられて居ないからである。従つて、我國民は所謂紳士や淑女に運動は必要がないと考へて居るらしい。

近代日本人の生活の缺陷

一體日本では身體若くは健康を馬鹿にする悪い癖がある。その證據には學校に於ける體操の成績などは如何でもよいと云ふ風である。生活の最も基礎とな

るべき肉體を鍛練する體操に對して斯の如き間違つた考へを有して居るのであるから、日本人には體育なしと云つた方が適當であるかも知れぬ。

一體世の中で、何が貴いと云つても肉體の健康ほど貴いものはないのである。地位も、財産も、爵位も皆貴いには違ひないが、要するにそれらは健康あつての物種である。常に苦蟲を噛みつぶしたやうな不愉快な顔付をして居る不健康な肉體の所有者であつては、財産が多からうとも爵位が高からうとも決して眞に愉快であるべき筈はないのである。

それに反して、よし、財産はなくとも、爵位はなくとも、潑刺たる肉體さへあれば、これに過ぐる幸福はないのである。

近代日本の文明は、此の肉體に注意を拂ふことを打忘れ、生活の根源たる可き肉體を粗末にした。それだから、私は今日の日本に於いて最も力を入れて

説く必要のあることの1は體育であると云ふのである。

如何に種々の學問を詰込み、智識を磨いて見ても、肉體が貧弱では仕様がな

實に偉大なる言葉

私が曾て米國紐育洲の或る學校の寄宿舎に居つた時のことである。此寄宿舎には日本學生が私の外に二名居て、米國の學生と共に運動を遣つて居たが終つて湯を浴びる毎に、注意して見ると、我々三名の身體のみは非常に貧弱であるのに反し、一緒に裸體になつて居る米國學生の何れもが筋肉隆々たる體格を有し、潑刺たる生氣をたゞへて居るのには、實に願みて心細い感を抱かざるを得なかつた次第である。

全く彼等は體育と云ふことに重きを置いて居る。彼等は生れてから死ぬるまで、短くは朝起きてから、夜寝るまで、否、寝て居る間でも體育と云ふことを忘れないのである。

或る日、隣室の一米國學生と共に湯を浴びて居る際に、彼の肉體が餘りに堂々としてゐるので、つい私は彼の肩を敲いて、

「如何して君は、此のやうな立派な身體を持つて居るのだ」

と訊いたところが、彼は笑つて指を三本出しながら、

「此の身體は三代かゝつて出来上つたのだ」

と答へた、それは何の意味かと反問すると、

「僕の祖父が自分の身體を大事にした。父が生れた。父が又自身の身體を大事にした。而して僕が生れた。僕が又僕自身の身體を大事にして居る」

と、彼は答へて、三代の周到なる注意、熱心なる努力の結果に依り彼の肉體は作り出されたものである事を丁寧に説明したのであつた。私は實に偉大なる言葉を聴くもの哉と深く感動した。三代かゝつて完成したと云ふのは洵に何と頼母しい、力強い言葉ではないか。こゝに活きた體育があると云はねばならぬのである。

人よりも多く感ずる愉快

私は實に現代日本に於て、體育に關する徹底した觀念を打込むことの必要を痛感する。西洋人の中でも特に米國人を見ると、如何にも彼等は潑刺として恰も生きてゐること、その事が愉快だと云ふ風に見える。これに反して我々日本人は如何にも沈み勝ちで又如何にも大儀らしく、少しも潑刺たる元氣が無し。

それで私は同じ喜びでも、身體の佳い、始終愉快らしくしてゐる彼等の味ふ喜びと、如何にも不愉快さうにしてゐる我々の感ずる喜びとは、分量に於て大なる差があるものではないかと思つて居る。

私が丁度加洲のリバーサイドに滞在中のことであつた。友人三名と自轉車の遠乗りをしやうと計畫をしてゐるのを聽いて、或る富豪の老婦人が、自轉車では疲勞するだらうから、私が自働車を一日奢らう。それに乗つて何所でも好きなところを乗り廻して出でなさい、と云ふので運轉手一人付けて自働車を貸して呉れた。

それで我々は喜んでその好意を受け、一日坦々たる大道を愉快に遠乗りしたのであつたが、或る田舎の料理店で、運轉手も共に晝飯を取つた時、我々も朝からの運動に大變美味く感じたが、運轉手は立派な愉快さうな身體の持主で

あつたので、我々の感ずる味さの分量と、彼の感ずる分量とは非常な相違のあるものではあるまいか、などと話しあつたことを今に忘れないのである。實際健康な時には何を食つても美味い。若し身體の具合が少しでも悪ければ何んな美食を取つてもうまくない。健康な身體の持主は常に山海の珍味に舌鼓を打つて居る道理ではないか。

運動體育生活化の實例

話の序であるから今話した老婦人に就いて述べると、その人は當時八十歳ぐらひで、自働車にも一人では乗れぬ、耳も眼も衰へて居るのであつたが、それで居て毎日自働車に乗つて郊外運動に出掛け、俱樂部に立寄つたりして愉快なる一日を送ると云ふ風であつた。

高齢である上に身體が不自由なのであるから、一日家に在つて自由に寝たり起たりして居ればよさうなものであるのに、大雨か大風でもない限は必ず出かけて運動をする。是は即ち運動體育が全く生活化されて居るのではないか。運動體育は全く、男女、老幼、貴賤に係らず、皆人の行はねばならぬ人々々の基本條件であるのだ。併し體育とか、運動とか云つたとて、何も庭球や野球やマラソンや機械體操やに限つた譯ではない。それは自分の此肉體の存する限り、行住座臥常に伴ふて行かねばならぬもの、影の形に於けるが如く添つて行かねばならぬものと承知しなければならぬのである。

肉體の改造が第一着手

日本人は兎もすれば物を非觀的、消極的に考へる癖がある。その原因は種々

あらうが、健康でないことも正にその一であらうと考へる。

潑刺たる肉體を所有して居れば必ず常に積極的に、必ず常に光明の側を見て進むことが出来る。今日は實際世の中が忙しくなつて、所謂、激務に執掌しなければならぬから殊に國民は皆健康で、忙しい事務に處しても平氣であるやうにしなければならぬ。愉快に、熱を以て仕事をし得るのは、皆健康なる肉體を以て始めて實行し得られることである。

今日は改造の聲が社會に滿ちて居る。改造には社會組織の改造も、生活様式の改造もあるであらうが、先づこの肉體の改造を計らないで居て何所に實際の改造があるか、若し日本人にして、生きて居ることが愉快であると云ふ風に感ずるほど健康であるならば改造は、さつさと獨手に出來上つて來るのである。

日本及日本人の偉大性に關しては茲に再び繰返す用はない。従つて又日本人

が歐米人に比して著しく遜色があるとも云はない。けれども若しも日本國民が今日より一層肉體が健康であつたならば日本國は更に一段の光輝を放つ事も疑はないのである。

若し此觀念が社會全階級に普及したならば、個人の幸福は云はずもがな、家庭、學校、官公署、會社等あらゆる所に愉快なる生活、愉快なる社會が現れて來るに違ひない。

日本は世界の名花たる櫻を有して居る。此の櫻たるや我々に喜びと勢ひを興ふるものであるが、その櫻花國の住民が朝から晩まで鬱陶しさうな顔をしたり、他人の弱點ばかり數へたがるのでは、甚だ不似合ひであると云はねばならぬ。然り我々は常に激刺たる、積極的な國民でなければならぬ。歐米人をして後方に墜若たらしむるやうな健康の持主でなければならぬ。

健康の三大秘訣

或る時、或る人が大宗敎家ヘンリー、ワード、ピーチャイと云ふ人に向つて斯う云ふ質問を發した。

「貴君は、他人の何倍と云ふ活動をしながら人一倍健康であられるが、何うすればさう云ふ事が出来るのか。」

と問ふた。ピーチャイ之に答へて、
「それには三つのことを守ればよい、曰く、よく食へ、曰く、よく眠れ、曰く、よく笑へ」と、云つた。

云ふまでもなく、よく食へと云ふのは滅茶苦茶に澤山食へと云ふ意味ではない。又無論美食せよと云ふのでもない。要するに常に美味しく食へと云ふのであ

る。愉快に食へといふのである。

然らば、どうしたなら美味く食べられるかといふと、さうする爲の身體の準備が必要である。身體が健康であれば食物が美味く食へるのであるが、美味く食へるやうになれば益々健康になると云ふ次第で、因果が相互に循環するのである。

常に睡眠不足の日本人

元來、日本料理には科學が多く入つて居らぬやうに思はれる。従つて滋養や消化と云ふ事がよく研究調和されて居らないのである。日本食は、どちらかといふと口と共に眼を喜ばすやうに工夫されて居るが、西洋料理はそれに比較すると口と共に、眼よりも腹を喜ばせるやうに出来てゐる。食物にまで體育の觀念

がよく入つて居るのである。

よく眠れと云ふのも無闇に眠れと云ふ意味ではない。

日本人は電車や汽車に乗ると、直ぐコクリ／＼とやる癖がある。朝の爽快であるべき時にも悪く眠つて居る。町を歩いて見ても、店頭で店員が盛んに居眠りをして居る。これは皆よく眠つて居ない證據である。よく眠れとは相當の間熟睡せよと云ふことで、眠つても愉快に眠れといふのである、睡眠も亦體育の一で、弱い人は其眠つて居るときでも如何にも苦しさうであるが、健康な人の睡眠は如何にも氣持がよさうである。

よく眠る爲にも準備を要するは勿論で、よく運動すればよく睡ることが出来る。つまり體育に留意すればよいと云ふことになるのである。

睡眠の健康上必要なのは改めて云ふまでもないが、人間の一生涯中睡眠に費

す時間は驚く可きほど多いのであるから、それについて研究を行はないのは愚なことではないか。

常に愉快なる修養

次に、よく笑へと云ふことは何んな事かといふと、常に愉快な氣持になつて居よ、何事に對しても、怒るな、嫉むな、泣くな、悲しむな、喜べと云ふ意味である。笑ふ門には福來るのではないか。

始終愉快な氣持になつて居れば健康を増進し、健康になれば自然愉快な氣持になるから、是れ亦相互に因果關係があるが、常に笑ふと云ふ氣持になる爲には大に修養が入るのである。

或は、不愉快な時にも笑へと云ふのは無理な註文で、そんなことは不可能で

あると云ふかも知れないが、或る心理學者は、悲しい時でも無理に笑顔を作つて見れば、自然に氣がやはらいで來るものだと云つたほどで、修養次第に依つては例へ苦しい境遇に有つても愉快な心持になつて居られるものと思はれる。

以上はピーチャイの健康法であるが、兎も角も我々が健康なる肉體を所有するが爲には勿論諸種の方法がある。何れも自己の境遇や身體に適應した方法を取るやうにすることが必要である。「幸福は、健康な肉體から」と云ふことを腹の底へ入れ、體育に注意を拂ひ度ひものと思ふ。

何の幸福も、激刺たる肉體より來る幸福には如かない。我等が、理想の健康體を有するに至れば、個人の幸福はもとより、家族もこれに依つて幸福を得、國家も喜びに満つるやうになるであらう。

今日我々が主張宣傳す可き大切なことは澤山あるが、その中で最も大切な一

つは體育であると信じてゐる。日本國民がこの問題に深甚なる注意を拂ふ日が一日も速に來らんことを私は衷心から希望して止まないものである。

九 積極主義に生きよ

東西兩洋文明の優劣

今卒然として、東洋と西洋とは何れが優つてゐるか、西洋の文明と東洋の文明とは何れが劣つて居るか、と云つたやうな問題を出されたとして、我等は、之に向つて直ちに、東洋が上等で西洋が下等であるとか、彼の文明が優等で、私の文明が劣等であるとか云ふが如き、解答は下せるものではない。然し何と云つても、近代文明は西洋の文明で、誰でもその偉大なるを否む譯には行かないのである。

實際我々の周囲のものに眼をつけて見んか、殆んど、その全部は西洋から渡來したものであるのに驚かされる。現に今、私が執務して居る此室にしても、曰くテーブル、曰く椅子、曰く時計、曰く電燈、曰く電話、皆な何れも西洋のものでないものはない。家屋も洋式の建築なら、衣服も洋服と云ふ譯で、窓外を往來する電車も汽車も何もかも彼の産物ばかりである。

我が日本が最近六七十年間に旭日昇天の勢で發展したのは、一は日本固有の偉大性がその原因をなしてゐるのは茲に改めて説くまでもないが、然しこの盛況を來たしたのは、實に彼の文明を我々が逆に利用して彼に向つたことになるのを忘れてはならぬ。今日我國が所謂五大強國の一となり、更に三大強國の一に數へらるゝに至つたのは、全く日本固有の偉大性に更に西洋文明を採用した結果に外ならぬものである。されば、彼が上等で我が下等であるとか、我

の文明が優等で、彼の文明が劣等であるとかいふが如き事は輕々に論斷す可き性質のものではないが、然かも之と同時に彼にあつて我にないものあり、我の彼に及ばざる彼特有のその偉大性を認めぬ譯には行かないのである。

西洋文明に對する態度

それならば、如何なる態度で、吾人は、西洋の文明若くは西洋人に對すればよいのであるか。先づその態度を決する必要がある。即ち如何なる立脚點から西洋を見、若くは西洋人種を観察す可きであるかと重大問題である。

私は曾て富士山の麓に、道と説いてゐる一友人を訪うたことがある。一夜をあかして翌朝早く起き出で、雄大なる富士の姿に接せんものと裏山を抜けて行つた。ところが、その日は一片の浮雲だに爲き眺へ向きの好天氣であつたに保

らす、豫期した雄大な富士は眼前に見えない、澄み切つた空には一向それらしいものが聳へて居ない。尤も眼の前に山が無い譯では無かつた。しかし、それは雲表に聳え、群山を壓する底の偉大なる山ではない。極めて平凡な、手のとぎさうな山に外ならぬ。併し之が富士ならずんば、富士は何うしたんだらうと、大に不思議の感を抱いて友人の家に歸り、朝食を共にしながらその話をしたところが、友人は大に笑つて、君の見た平凡な山が矢張富士である。然し古來から云ひ來つたやうに富士には見方があるので、何所から見ても佳いと云ふ譯には行かぬ。今に案内するから待ち給へといふので、食後その友に伴はれて出て行つた。そして富士を背にし箱根の方を指して約二三分歩いて後に、友人の注意に従つて振返つて見たところが、驚く可し、今朝極めて平凡な小さなものにしか見えなかつた山が、今度は雲表に聳へて如何にも立派に見えたのである。

ある。

友に誘はれて私は更に再び箱根の山の方に歩いた。そして小高い山に登つて振返ると富士は更に前よりも雄大秀麗な姿となつて眼前に現れたのである。即ち朝獨りで見えた時は、

來て見れば聽く程になし富士の山

の想をなし、今度は

來て見れば聽きしに優る富士の山

の歌に同感したのであつた。そして此の二つの見方が何れも眞理を有するのに感心したが、さう云ふ譯で物を見るには先づ態度即ち自分の立場を明にして置く必要があるのである。

西洋文明觀察の二つの型

然らば、吾等が西洋文明を見る場合、又西洋人を見る場合、我等の立場を如何に決したならばよいか。洋行した日本人の西洋觀を檢して見ると先づ二種類に區別することが出来る。

一は、見る物、聽く物、西洋のものは頭から貶すと云ふ遣方で、西洋ととも一向つまらぬものである。鐵道でも、大學でも何でもかでも日本のそれに比較して格別勝つても何ともして居らぬと云ふ風の見方である。

他の見方は一から十まで西洋を崇拜する遣方で、何でもかでも日本の物をつまらぬとし、日本の家屋は西洋のそれに比すれば貧民窟の如き觀がある、學者でも日本の學者は西洋の精粕を嘗めて居るもので少しも權威がないと、云ふ風

に考へるのである。

しかし、五年、十年と西洋に住み、之に馴れ、心が落付き、氣が顛倒せぬやうになると、彼の偉大性を認めると共に、その反面もよく分り、我にも弱點があれば彼にも弱點があると云ふことが理解され、彼の長は長、短は短、我の長は長、短は短と心明かに合點される。

曾て岩倉大使一行が洋行された時、その約半數は西洋文明の隆盛に驚倒したさうである。實際當時西洋は十九世紀の文明が爛漫たる花を開いて居た際であつたから、日本に居ては新智識であり、先覺であるそれらの人々が喫驚したのも無理ではなかつた。彼等は恚う考へた。今までは自分達は所謂井底の蛙で、何も知らなかつたが、西洋が斯る偉大なものであつて見れば我等の逆も敵する底のものではない思つたのである。即ち彼等は腰を抜かして仕舞つたのであつ

た。而して他の半分の人々は、西洋文明の偉大なのに驚きはしたが、一方に、これは面白い、これを日本に持つて歸つて新日本を建設しようと思つて胸中に深く決心したのであつた。そして他の者等は日本に歸つて後、全然西洋を恐れて元氣がなく、今日の言葉にて云へば、神經衰弱に罹つて了つたが、彼等は驚くと共に喜び大に勇氣を出し、新日本の建設の爲に盡したのである。

これは實に昔の話のみではない。今日でも洋行する人々に、歐米を罵倒する人若くは歐米に心酔する人、解り易く云へば、頑迷不靈の人若くは腰を抜かす人と、彼の優劣長短を明に認める人との別が判然とあるのである。

然らば觀察の態度如何

然らば如何云ふ立場から西洋を見たらばよいかと云ふに、東西兩洋を比較し

て直ちに上等下等の區別に眼を奪はるゝな、優等劣等の觀察に力を入れ過ぎるなど云ふことである。即ち縦に觀察せず、横に觀察せよ。彼にも偉大な點があれば我にも偉大な所がある。我にも短所があれば彼にも短所があると、相對立する相違の問題といふ所に力を入れ、此態度を以て西洋を觀察する事が必要である。

換言すると、西洋文明は極めて偉大ではあるが、然しそれは我々東洋人の教科書では無く、要するに参考書である。教科書ならば一から十までそれに従はねばならぬが、参考書であれば自分に必要の部分だけを取り、後は棄て、仕舞つて構はない。即ち心朗に彼は彼、我は我の態度を持つて見て、始めて彼の偉大性を眞に認めることが出来るのである。

支那の先哲は柳は綠、桃は紅と云ふことを云つてゐるが、私はこれはデモ

クラシイの心髓に徹底して居る言葉ではなからうかと思つて居る。要するに西洋は西洋としての長所があり、東洋には東洋の長所があり、白色人種、黄色人種何れも特色がある。柳は緑であつて柳の値打が在し、桃は紅であつて其美が優るのである。

西洋文明の長所は何か

以上は、東西文明の比較観察は如何にしたらばよいかと云ふことを述べたものである、私は今此観察法の立場に立つて、

來て見れば聽く程になし富士の山の見方を差控へ、

來て見れば聽きしに優る富士の山

の積極的觀察を以てし、茲に積極主義の提唱を試みようと思ふのである。

今西洋の長所は何であらうかと考へる時に、私はそれは彼が積極的であることであると思ふ。又それと反對に東洋の短所は消極的である所に存するのだと信ずる。

支那で北京語の使はれる所に、日本人が行つて始めに覺える言葉の一つは沒法子と云ふことである、それは、仕方がないと云ふ意味で、支那人が盛んに使ふから第一に覺えるのである。然し翻つて吾人の生活を見る時、矢張仕方が無いと云ふ言葉を非常によく使ふのである。

又日露戦争後、一時露國の敗けた原因が種々熱心に研究されたが、或る人はそれは露國人にニツチエウオと云ふ癖があるからだと言つた。これも矢張仕方が無いと云ふ意味の言葉である。一體露國人は東洋人と西洋人との混血兒で、

東洋人らしい點を多く持つて居るが、之等の諸例で明瞭なやうに東洋人は消極的に傾きたがる。

日本人は他人に御馳走するにも、「これはつまらぬ物ですが」と謙遜する。子供を客に褒められても、西洋人ならば、「はい有難う」と云ふべき所を、「いへ、どういたしまして」と云ふ。日常生活に於ける心の働き方が我は萬事消極的である。つまり一寸した會話にも熱がないので、その消極的な傾向が遂に人生觀となつて來るのである。「さう大酒を呑んでは困るではないか」と云ふと、「いや酒ぐらゐの仕方が無い。」と來る。先輩に就職口を頼みに行くと、「かう世の中が不景氣では駄目だよ。」と頭から蹴飛ばされる。何故、成程、酒はよさうとか節酒しようとか、不景氣ではあるが一生懸命探して遣らうとか言はないのか。何でも此調子で、消極的で、打こわし主義でやらねば氣がすまぬが如く思はれる。

消極主義のドン詰り

さう云ふ消極的の遣方をして居る結果、我々には我慢と云ふ一つの特性が發達した。我慢と云ふのは換言すると現状維持である。梅干で我慢をしろ、寒くとも我慢をしろ、路が悪くとも我慢をしろと云ふのである。

西洋文明の奥底を敲くと、我慢の代りに改革が出て來る。悪ければ何んでも改革しやうと云ふのである。彼等には積極的精神が流れて居る。

この我慢には、一向に積極味がないのであるが、これには随分極端なものがある。印度に行くと、御寺の椽の下に、目計りバチクリやつて、まるで枯木のやうな人が坐つて居る。聽いて見ると、十年も十五年も癡乎と同じ所に坐つて居るのださうであるが、此の世で我慢すれば彼の世で極樂に行けると云ふ信仰

からやつて居るのである。大道で釘の出た板の上に坐り、血をポタ／＼垂らして胡座をかいて我慢してゐる者もある程である。

我國民は自分の國を數十年間に世界三大強國の一にした程であるから觀察の仕様に依つては改革主義の國民であるとも云へる。然しその生活の状態を反省すれば矢張り東洋流の消極的の觀念が因縁深く付き纏つてゐるのを看過するところが出来ぬ。矢張り我慢の國民である。

尤も此の我慢も積極的に解すれば結構だ。例へば貧しくても構はないから我慢して飽くまで奮闘しようと思ふ風になればよい。又此の我慢は、偉人が用ゐると達觀と云ふことになる。其所まで行けば消極を通り越して積極となり、否定から肯定に進んで居るのである。併し之は常人には六ヶ敷のである。

積極主義のドン詰り

東洋人の此の達觀に對して西洋人には執着がある。達觀が消極主義のドン詰りならば、執着は積極主義のドン詰りである。西洋文明を偉大にしたのは一に此の執着の結果であらうと私は考へて居るのである。

つまり西洋文明は人間の力を認めた文明である。これに反して東洋文明は自然崇拜である。東洋は自然に順應し、西洋は自然を征服するので、それは彼等の稍極味に依つたものである。私は達觀にも眞理が含まれて居ることを認めるが、千人の中の一人が得られる達觀よりも、萬人に悉く理解し得られる、執着の方を一層實際的だと考へて居る。

日本人の陥り易い弊

我々日本人に起り易い弊は圓滿になると云ふことにあるのではあるまいか。一般に圓滿になつたものが、智者とか、物の道理の分つた人とされ、不徹底なことをし、不徹底な言葉を巧みに使へば智者でもあるかのやうに思はれて居るが、これは大に間違つたことで、私はそれを悪圓滿となへる。又世の中は太く短く送るに限るとか、六ヶ敷い理屈や面倒なことを云つても仕方がないぢやないかと云つて、達観して居るらしいことを云ふ人もあるが私はそれを悪達観と云ふ。私はこれらの間違つた考が我々を消極的にするものではあるまいかと平常考へて居る。

それで、私共は何事でも仕事を積極的に考へることが必要である。「百姓はつまらぬ」と云ふ所を「百姓が居なければ世間の人が困る」と考へる。「労働者は下らぬ」と云ふ所を「労働者が無ければ産業が起らぬ」と云ふ風に考へるのである。

歐州戦争中に、米國が勘忍袋の緒を切つて參戦した當時の事である。ウキルソン大統領の威望は頗る大であつた。ウ氏は時々教書を發して、正義人道を説いたが、それを讀む一億の米國民は實に血湧き肉躍るの感があつたのである。然るに一部の日本人はこれを消極的に觀察し、米國人は理想家だから、正義とか人道とかを只言葉の上で弄んで喜んで居るのだ。それ故餘程割引して解釋せねばならぬと消極的に考へたものである。然し血の若い、元氣の激濶とした米國人には、實際に自由、平等、正義と云ふやうなことが強く響くのである。

彼等が大統領の言葉に歩調を合せ、大統領が善と云へば善とし、右せんと欲すれば右した態度は、日本人よりも激潮として、積極的氣分が横溢して居たのである。

東洋に國らしい國をなすものは、我が日本位のもので、その他は語るに足らぬのである。我國は實に旭日滔天の勢で發展して居るが、然し前にも述べたやうに、その消極主義は、ともすれば惡達觀や惡圓滿となつて現れて禍をするのである。

試みに新聞紙を閲すると、昨年から今年に懸けて自殺者の數は實に驚く可く多數に昇つて居る。情死者の多きが如きは痛嘆に値するのである。これは如何なる原因に依るのであらうか。私はそれを消極主義から來たものであつて即ち惡達觀から來たもの、宿命觀から來たもの、生の執着を失つた、光明を見ずに闇

黒を見るところの消極主義から來たものであると斷言したい。

積極及消極的節約

最近日本全國に節約の聲が盛んである。近來は非常なる輸入超過を見、物價などの高いことは世界一である。斯の如き状態で行つたならば日本の前途が危いと云ふところから起つたのが此の節約運動であるが、それを消極的に遣ると沈滞を益々沈滞に、不景氣を益々不景氣に、陥らしむる恐がある。

節約には、積極と消極の二がある。例へば二回の辨當を一回のにする。絹布を廢して木綿を着る。自動車に乗るところを人力車にする。芝居を見るところを活動寫眞にして置く、或は又その活動寫眞も見ないで置く。物見遊山の數を少くすると云ふのは消極的な遣方である。勿論浪費を節すると云ふことは大切

なことには違ひない。然し吾人は決してそれのみで満足すべきではない。根本義を積極に求めねばならないのである。之を譬ふれば積極的消費は大乗であり、消極的消費は小乗である。

積極的節約の中心點

積極的消費の中心點を何所に置く可きであるか。私は時間の節約といふところに之を發見したい。其所に我々の歩調を進めることが出来、始めて節約の積極的意味を見出すことが出来るのである。

我々は先づ第一に、時間を所有して居るか如何かを吟味する必要があると思ふ。所有して居らねばその價値は判らない。我々が時間の所有者になると云ふところに積極味が現れはせぬかと考へられる。現在主義であり、時間充實を志

し、時間を空費せぬと云ふところに自然に努力が生れる。

第二には時間を巧く整理して行くことが必要である。馬や犬に時間の整理はない、それを行ふことは人間に限ることであるが、時間を生かして使ふことは節約であり、大なる積極的生活になるのである。

先頃四十年來、宮城内の舊本丸で毎日發射せられた午砲が軍備縮少の結果、廢止されることになつたので、東京市の方でやることに相談し、それを引受けることにした。

此の午砲といふものは極めて時間を正確に扱ふもので、一分か二分遅れても發砲することが出来ぬと云ふ程のものである。

私は午砲と市民生活を近寄らしめること、換言すれば、市民をして時間の所有者たらしめ、時の觀念をその腦裏に打込み、積極的の節約をなさしめたいと

思つて居る。

以上、色々述べて見たが、之を要するに、我等の心や氣分や行動をして常に積極的に向はしめ、否定より肯定、悲觀より樂觀へと進めたいものと思ふ次第である。

十 現代指導者の風格

民衆時代の指導者

現代は、世界を通じて、民衆時代でふ聲に壓倒されて居る。事實、今日の世の中を大觀すれば、其世相の悉くが、漸次デモクラシーの色彩を帯びて、而して急激に變轉しつつあることを認めざるを得ない。然らば、そのデモクラシーとは一體何をさして言ふのか、吾人は之に對して、それは自治の意義なりと言ひたい。もとより世の學者達の間に於ては、デモクラシーに對して種々の解釋をなすものがあつて、其説がなかくに一定してゐない、がそれは概してデ

モクラシーの形式に墮し、或は皮相の解釋に過ぎない場合が多く、寧ろ我等は中核にふれるといふ意味に於て、所謂デモクラシー即ち現代精神の眞髓は、自治にありと言ふ方が極めて明確適切であると考へる。而して、自治の聲愈々旺盛に、自治の慾求益々熾烈なる現代を考察して、之に民衆時代なる形容を當てはめることは寔に至當の言と云はねばならぬ。さて、然らば、自治とは何ぞやと言ふに、それは自由を欲し、平等を希望するもの即ち文字の示すが如く、全く自らをして自己の主人たらしめたいと思念する要求と、實行に他ならぬ。然るが故に現代人はすべて、從來の束縛、習慣、階級の壓迫を排除し、その他一切の舊套を脱して新しく自己獨立の生活を創造せんとする白熱的希望に燃え且つ驅られてゐるのである。斯の如き民衆時代に於て、然らば、民衆それ自身に社會を任して可なりや否や、即ち民衆自らが其方向を發見し自己のなすべき正

常なる生活を打開し行く能ありや否やと言ふに、各個々の本能と希望は如何に熾烈なりと雖ども、之を社會の形に於いて一致結束せしむる事は從來の例に徴して極めて困難なのである。そこには自由あらんとしても統制がない、自治あらんとしても訓練がない。支離滅裂、殆んど收拾し難き混亂を惹起する事が往々にしてある。民衆自身に於て、自己の正當なる針路を發見する事がむづかしいとなれば、勢ひ、こゝに指導者なるものを必要とするわけであつて、民衆の胸の高鳴りを我が胸に感じ、民衆の血の流れが直ちに我が血の流れと一致するといふ自覺の上に立つ處の指導者を得て、民衆は初めて、救はれ得るものなのである。何時の時代に於ても、人間社會には必ず指導者があつた、民衆は之に従つて右に左に其針路を保つてゐたものである。然かも現代は、舊時のそれにもまして、眞の意味に於ける指導者を要する時ではないか。昔時の指導者な

るものは、おほむね指導者といふよりも命令者、號令者、或は專制者と名づく可きもので、その民衆を統率する態度は、吾獨り賢しとし或は傲慢不遜、餘程の壓制振りを發揮したものであつたが、それで、そのまゝ濟んでゐた。然し、現代は全くさうでない。等しく指導者とは言つても、よく民衆に觸れ、民衆を理解し、民衆の聲が彼の聲であり彼の聲が民衆の聲であるといふ關係を以て進む處の指導者を得なければ、全く治まりがつかなくなつた。此意味に於て、現代は民衆時代といふと同時に、又實に指導者の時代也と言はねばならぬ。

指導者は先づ己が氣分を檢討せよ

然らば現代指導者の風格如何。その要領如何。

現代指導者たるものは、先づ第一に省て、自己の心持を探究するの必要が

ある。昔時の指導者は只一片の指揮命令を以てよく人民を動かすを得たが、少なくも現代の民衆は、かゝる無理權能を以てしては、最早や一步も動かない。民衆の心持即ち指導者の心持となり、民衆の血が直接指導者の胸の高鳴りとなる。此愉快なる心持、常に生々とした心持、人を愛する心持、世の爲に何事かをなさんとする心持を有し、民衆と指導者とが、全く同情同感の立場に立つべきものでなければならぬ。常に氣ひづかし氣に、むすぼれがちに、陰鬱な氣分を包藏するやうな性質の人は、他に如何なる有能の方面ありと雖ども、それは到底現代の民衆を率ゆる指導者の質ではない。前述の如く、己れ自身に躍々として生ける心持あり、人を愛し、民衆を戀ひ慕ふ、換言すれば大なる愛情の人、深き涙を湛へたる人、同時に燃ゆるが如き熱情の人でなければならぬ。斯の如き指導者の精神の溢るところ、彼を得て初めて、現代の民衆は自己の方向を

識別し、完全にその獨立の生活を創造し得るものである。故に現代指導者たるものは先づ省て自己の精神状態の、かゝる境地に立脚せるや否やを探究しなければならぬ。

名槍の人

現代指導者の風格を検討するに、次に彼は名槍の人たる事を必要とする。名人の槍先とても、其打振ふ穂先は、もとより一本に過ぎないけれど、それが實に十本にも百本にも亂生して見ゆると稱せられてゐる。一たび、彼の槍先に立たんか、或は上に或は下に、前後左右の嫌ひなく其穂尖が現はれて、殆んど手を加へ足を踏出すべき寸分の隙すら見出せない。現代指導者の働きは將さに此風格がなければならぬ。東に彼の意志人格の顯現あるかと思れば、同時に西に

彼の風格が舐々相摩す響を發してゐる状態、——即ち全民衆の恰ねくすべてに彼の心持が徹底してゐなければならぬ筈だ。恰かも親の愛情が多數の小供に漏れなく深く強く浸潤するに似て居らねばならぬ。三人の小供を持つ時、親が注ぐ愛情と、五人の小供を持つに至つた時注ぐ愛情とは、其小供一人々々に就て、何等の差違、過不足をも發見されないのと、同様でなければならぬ。親の愛情なるものは、其小供の男たると女たるとを問はず、賢愚の別に拘はらず、能不能に關係せず、美醜によつて差別なく、一人の時も二人になつても、よし十人百人になるとても些さかの變りなく、かゝるすべての區別を超越して、恰も太陽の光線が無差別平等に世界の隅々を照し出すが如くに小供の上に注がれるものなのである。現代指導者の風格將さに斯くの如く然あるべきで、彼が振り出す槍先、彼の意志、人格、手腕、氣分の現はれば、社會の種々の階級、千

差萬別の異同を超越して、平等に、公平に、隙間なく、深く、強く注がれなければならぬのである。

民衆と共に偉大なれ

更に進んで、現代指導者たるものは彼れ自身が偉大なるのみを以て満足すべきではない。彼れひとりの偉大、昔時はそれでよかつた、何となれば、往時の民衆は其質、其内容に現今と大いに異なり個人々々に何等の自覚なく、全體を通じて一個の盲從的集團に過ぎなかつたのだから、之を帥ひる賢人の一舉手一投足は、よく彼等を思ふがまゝに操縦し得たのである。之を例せば、日本全國にも可なり多くの模範町村なるものがある。立派なる町村長を戴き、其指導幹旋によつて着々として模範町村たるの實蹟を擧げてゐる。而かも一朝、その名

町村長たる人が其職を去らんか、昔日の面影は頓に消失して、温順愚昧なりし民衆は各々適從する處を知らずして彷徨し、之が嘗ては世に謳はれし模範町村なりしかと、人をして、そゞろ其成の果ての餘りにも悲惨なるを憫歎せしむるやうな事實が往々にして發生するを見る。これ即ち賢人政治——英雄主義の末路を表象するものではないか。賢人——英雄、彼の健在なる時は兎も角も、彼百年の後は忽ち急轉直下、桑田變じて蒼海となる如き變化を示す比々皆然りである。賢人政治の形式に於ては、民衆に服従はあつても自覚がない、盲從はあつても理解がい。彼ひとりの主義思想に變化進歩はあつても、彼れを除く全部の民衆には何等の進歩も向上もないのだ。換言すれば自覚なく理解なく自治の訓練なき薄弱極まる所謂模範町村に過ぎないのが多いのだ、更に言へば哲學を有せざる町村であるのだ。

然るが故に、現代指導者たるものは、所謂馬上に其雄風を現はして大聲疾呼民衆を指導する底のものではない。己れのために敢て民衆を犠牲にし、又は己れの喜怒哀樂を以て民衆を支配する如きものでは絶対に之ないのである。眞に民衆を愛し、眞に民衆を敬し、民衆それ自體をして偉大なるものたらしむる底の指導と手腕を捧ぐるものでなければならぬ。彼れが己れ一人の優越を過信して、愚昧なる民衆を傾使する風に誇示するならば、禍ひたちどころに蕭牆の内に起るであらう。現代指導者たるもの、思ひを深く此所にいたすべきではないか。民衆と共に喜び、民衆と共に走る指導者を必要とするのである。

純乎たる社會人

最後に、現代指導者たるべきものは、純乎として純なる社會人たるを要すと

切言したい。云ふまでもなく、社會人とは、社會と共に考へ、社會と共に動き、社會と共に喜び、社會と共に泣く事の出来る人を言ふのである。由來我日本人に於て、最も缺けたるもの、一つは、社會的自覺である。我國民は常に、社會的自覺といふものを知らぬ、こゝに一つの會社があると假定する、株主は汲々乎として常に配當の多からん事を要求し、配當少なきを以て重役の責めなりと難じ、其間、社會状態の變遷、或は事業の性質、事業界の趨勢等を考察するだけの熱意もなければ、重役の苦慮、労働者の慘苦等に對して一顧を與ふるだけの情愛をも把持せず、株の所有者たる觀念はあつても、會社其物を社會的に所有すると云ふ自覺がない。會社のため、會社公共のためならば、三年にても五年にても無配當のまゝ甘んずると云ふ熱切なる氣魄を有するもの果して幾人ありや。これ、株主たる事は出來ても、よく會社を社會的に所有する事を得ない

證據である。社會的自覺のなき證據である。案ずるに、これまでは、現代的意味に於けるが如き社會がなかつた。すべてが縦の道德、縦の命令服従の状態、要するに縦の文明であつた。社會的共同の觀念も養成されなければ、社會的に自覺、獨立、所有、自治等の修養も得られなかつた。横の文明、横の道德、隣人の道德といふものを知らぬ薄弱なる状態で遺憾ながら社會的訓練といふものを與へられずして今日まで推移して來たのである。然かも時代は一變した。すべてが過去の迷妄より脱しなければならぬ。現代指導者たるものは純乎として純なる社會人たるべしとは、實に此意味に外ならない。電車内は群集に非ずして社會の一小縮圖であらねばならぬ。乗客の各自が、等しく社會的良心、社會的禮讓、社會的自覺にめざめて、協同扶助の公共的精神を發露するならば、それは、直ちに眞に自覺せる民衆によつて形造られた社會と云ひ得やう。之に

反して、乗客なる彼等が、無思慮に、無反省に、在來の利己的習慣を發揮して争闘排他の醜態を改ためないならば、それは依然として、昔ながらの愚味なる群衆に過ぎない。現代的指導者たるべき、彼の使命は、實に、此の、所謂、電車内の乗客をして、自覺ある民衆たらしめ、以て之を社會たらしむるか將た又、愚味なる群衆に止めしむるかといふ處に係つてゐるのである。繰返して言ふ、之れがためには、彼自らが、偉大にして、純乎たる社會人としての理解と之が實際とを體現しなければならぬのだ。

以上、現代指導者たるべきもの、風貌を論じて見た。尙此他にも、指導者の種類境遇等に依つて更に考察すべき幾多の風貌を必要とするであらう。従つて論じて要をつくさない箇所もある。先づ大體に於て、最も切缺くべからざる要項を、心に浮ぶが儘に列擧すれば、右の如くであると信ずる。

十一 新忠義道

偉大なる現代

過去は黄金、現在は瓦礫、未來はダイヤモンドといふやうに、一般に、人は現在に多くの價値を認めず、驚くべき現在の變化や事件を眞感し、認識すること能はずして、反つて過去に起つた事變を特に偉大なるものゝ如く感ずるのが常である。

例へばナポレオンと云へば、空前の大英傑のやうに、グラッドストーンと云へば現在の政治家が到底及びもつかぬものかの如く、リンカーンと云へば正義と

智慧の權化の如く、西郷隆盛と云へば古今獨歩の豪傑の如く考へ、現代人は、到底それらの人々に及ぶ可からざるものゝやうに思ふのが常であるが、これは時代を遠ざかるに従つて、事件が偉大化され、人物が理想化され、神化されて超人の如く考へられる結果に過ぎないのである。實際、事實の眞相を研究すれば今から五十年、百年、二百年の過去に活躍した政治家、軍人等が斷じて現代の政治家、軍人に勝つて居る筈がないのである。過去人は過去では豪傑であり英雄であつたらうけれど、若し、昔の儘にして今日の世に在らしめたならば、時代遅れの田舎漢に過ぎないのである。多くの人は時代を勘定に入れず、過去を直ちに、現在よりも偉大なるものゝ如く考へ、過去は、過去に於てこそ偉大であつた事に氣づかぬのである。

この觀察は單に、人物に對してのみならず、多くの事件に於ても同様である。

彼の佛國革命、普佛戰爭、無敵艦隊、宗教改革等は、その名を聽いた丈けでも、如何にも非常なる出来事のやうに感ずるのであるが、然し今日の世界の動亂變化に比較すれば、それほどの大事件ではないのである。活眼を開いて見れば、實に現代ほど偉大にして驚嘆すべき時代はない。人物に於ても、最近に故人となられた大隈侯や原敬氏や、又現に生存中の東郷元帥の如きは過去の如何なる人物に比しても遜色の無い偉大なる政治家又軍人である。例を外國に求むれば、米のウキルソン、ルーズベルト、英のロイドジョージ、佛のクレマンソー、フオシユ元帥、希臘のヴェネゼロス、又一散地に塗れたが、獨のカイゼルや、借ては露のレーニン、トロツキの如きは、何れも過去の人物に比較して、寧ろより偉大なる活躍を示してゐるものである。それよりも一層著しいのは此活社會の出来事で、過ぐる世界大戦に於いては瞬く間に歐洲の諸大強國が踵を接

して打倒れ、一方にはチエツク、スロバートツク、ポーランドの如き大國が云はゞ一夜にして現れると云ふやうな大變動を現した。斯る大事件は古今無比で、恐らく今回の世界戦を人間生活の一の峠、大なるエポック・メーキングとして、後世の史家が椽大の筆を振ふに恰好の題目であらうと思ふ。

新らしき國家哲學

其處で、吾人は現在を正視して斯る大變動、大事件を痛感するとせば、當然此等の事より流出づる新なるものをも同時に看取しなければならぬのである。實際、今回の世界戦を起點として世界に大なる波が起つて來たのである。その大きな波は幾つも起つて、それは枚擧に遑のない程であるが、今は其一を申し見れば、我々日本人の眼からは、實に戦慄すべく、驚嘆すべき世界の一大傾

向が存するのである。それは世界の國々から君主が其姿を隠すといふ驚く可き事實である。

昨日までは絶対の権力者なるが如く思はれて居た露國のロマノフの朝廷も、今日は倒れて君主專政は亡びてしまつた。昨日までは朕の陸海軍は世界を征服するの力ありと豪語して居たカイゼルも遂に本國を逃げ出して、今は他國に落人の身となり、獨逸は忽ちに共和國となつて終つた。更に歐洲皇室中に由緒高きを誇つた埃洪國の皇帝は蒙塵せざるを得ぬやうな事情となつた。最近に至つて土耳其や希臘の皇帝の影又甚敷くうすくなつた。頭を廻らせば隣國の支那は共和國となつて、清國皇帝は十年以前に既に其姿を没して居る。太平洋の彼岸米國に赴けば、茲には建國の昔より、國民の選舉になる大統領が政治を行ふて居る。大西洋を横切つて英國に行かんか、嚴として皇室は存するも、人は英

國の主權は議會に在りと云つて居る。その他白耳義西班牙等には皇帝はあるが、何れも世界の氣勢に影響あるほどの有力なものではない。只一つ歐洲大陸に於て強國の一に數へらるゝ伊太利が君主政治の形を存して居るが、それは我々日本人の口に唱へ、胸に潜めて居る君主政治とは聊か趣を異にして居るものゝ如くである。換言すれば、彼等の君主は我々の心に懐いて居る天皇とは同一不二のものではないやうである。

斯の如き歴史の波、驚く可き變動は現に事實として、我々の眼前に展開して居る。茲に於いてか世界の此の一の氣勢を我々日本國民は如何に迎へ、如何に解す可きであらうか。

改めて説くまでもなく、日本は天皇を中心として立つ國、天皇即ち國家なりと云つても差支へない國である。若し此の點に動搖が來れば國の礎を危くす